

平成18年度

**奈良県公立学校優秀教職員
表彰実践事例集**

平成19年4月

奈良県教育委員会

目 次

【小学校】

学年・学級経営の部

- | | | | | |
|---|-------------------------------|------------|-------|---|
| 1 | 言葉、そして、心を育む学級経営を目指して | 香芝市立下田小学校 | 土橋 郁代 | 1 |
| 2 | 教育相談を生かした学級経営 | 桜井市立大福小学校 | 中谷伊希子 | 3 |
| 3 | 学級通信を中核にすえた学級経営について | 平群町立平群北小学校 | 森口 玲 | 5 |
| 4 | 児童一人一人が元気になって力を伸ばすことができる学級づくり | 天理市立福住小学校 | 綿谷 圭介 | 7 |

教科教育の部

- | | | | | |
|---|---------------------|-----------|-------|---|
| 5 | 国語力を高める指導方法の開発を目指して | 葛城市立磐城小学校 | 中谷 直子 | 9 |
|---|---------------------|-----------|-------|---|

生徒指導の部

- | | | | | |
|---|--|------------|-------|----|
| 6 | 問題を抱えた子どもたちに寄り添い、職員みんなで課題を共有して取り組む生徒指導について | 平群町立平群西小学校 | 教職員集団 | 11 |
| 7 | 児童を支えるための教師間の連携 | 平群町立平群南小学校 | 横山 尚子 | 13 |

特別活動の部

- | | | | | |
|---|----------------------|-----------|-------|----|
| 8 | 「豊かな人間性」をはぐくむ特別活動の創造 | 香芝市立下田小学校 | 吉野 隆博 | 15 |
|---|----------------------|-----------|-------|----|

総合的な学習の時間の部

- | | | | | |
|----|--------------------------|------------|-------|----|
| 9 | 斑鳩町内小学校の総合的な学習活動の具現化に向けて | 斑鳩町立斑鳩西小学校 | 上田 昌功 | 17 |
| 10 | 地域の伝統文化を学び豊かな心を育む取組について | 斑鳩町立斑鳩小学校 | 小野 英子 | 19 |

障害児教育の部

- | | | | | |
|----|------------------------------|------------|--------|----|
| 11 | 特別支援教育に向けての「ことばの教室」の取り組みについて | 平群町立平群東小学校 | ことばの教室 | 21 |
|----|------------------------------|------------|--------|----|

へき地教育の部

- | | | | | |
|----|--------------|-----------|-------|----|
| 12 | 表現力の高まりをめざして | 曾爾村立曾爾小学校 | 今井 絹代 | 23 |
|----|--------------|-----------|-------|----|

【中学校】

学年・学級経営の部

- | | | | | |
|----|--------------------------------|-----------|-------|----|
| 13 | 学級担任のよろこびと興味・関心を持って楽しく校務を進めること | 檀原市立八木中学校 | 松田 明彦 | 25 |
|----|--------------------------------|-----------|-------|----|

教科教育の部

- | | | | | |
|----|---------------------|----------|-------|----|
| 14 | 数学科における学力向上推進のための取組 | 天理市立北中学校 | 松井 恵宣 | 27 |
|----|---------------------|----------|-------|----|

生徒指導の部

- | | | | | |
|----|--------------------------------------|-----------|-------|----|
| 15 | 「生徒理解を深めるための校内組織の整備と地域・関係機関との連携」について | 平群町立平群中学校 | 倉内 清共 | 29 |
|----|--------------------------------------|-----------|-------|----|

進路指導の部

- | | | | | |
|----|-------------------|-----------|-------|----|
| 16 | 生き方教育としての進路指導の再構築 | 御所市立御所中学校 | 松岡 敬興 | 31 |
|----|-------------------|-----------|-------|----|

健康安全教育の部

- | | | | | |
|----|----------|--------------|-------|----|
| 17 | 心の健康を願って | 大和郡山市立郡山東中学校 | 西村 敬子 | 33 |
|----|----------|--------------|-------|----|

部活動の部

- | | | | | |
|----|--|-----------|-------|----|
| 18 | 平成17年度全国中学校体育大会優勝監督として「自主性を身につけていく部活動のあり方」 | 奈良市立都南中学校 | 奥村 浩一 | 35 |
|----|--|-----------|-------|----|

19	女子砲丸投げ 全国優勝に至るまで	大和郡山市立郡山中学校	郡山中学校陸上部	37
20	中学校における剣道部の指導と生徒の健全育成について	香芝市立香芝中学校	森山 哲也	39
21	部活動を通して豊かな心をもった生徒の育成	生駒市立上中学校	吉迫 隆志	41
へき地教育の部				
22	十津川の自然を活かした理科部会の活動	十津川村へき地教育研究会理科部会		43
【高等学校】				
学校教育目標の具体化の部				
23	特色ある学校づくりについて	奈良県立添上高等学校	中野 善久	45
24	「生きる力」の育成を目指して	奈良県立志貴高等学校	大山 茂樹	47
25	人間探究コース設置に伴う特色化について	奈良県立榛生昇陽高等学校	市川 雅利	49
26	「スポーツをとおしての人づくり」生涯スポーツ科設置への取り組み	奈良県立大和広陵高等学校	吉岡 健蔵	51
学年・学級経営の部				
27	「心の教育」を中心に据えた生徒指導（学年運営）について	奈良県立香芝高等学校	松山 敏子	53
教科教育の部				
28	歴史文化コース（科）の創造・活性化にむけて	奈良県立斑鳩高等学校	津浦 和久	55
29	「実験・観察」を中心とした理科教育の実践	奈良県立御所工業高等学校	理科・教員グループ	57
30	生徒に「やりがい・生きがい・自信」をもたせる教育活動の実践について	奈良県立御所東高等学校	春田 晋司	59
生徒指導の部				
31	時代が変わるなかでの生徒指導	奈良県立青翔高等学校	我妻 学	61
国際理解教育の部				
32	「英語コースの充実」と「国際理解教育の推進」	奈良県立桜井高等学校	竹中 三郎	63
障害児教育の部				
33	視覚支援の必要性和有効性について	奈良県立奈良東養護学校	辰巳 武志	65
健康安全教育の部				
34	学校の実態に応じた保健室経営	奈良県立平城高等学校	村上 理英子	67
情報教育の部				
35	王寺工業高等学校におけるIT化	奈良県立王寺工業高等学校	倉田 嘉人	69
部活動の部				
36	自分の可能性に夢と希望を持たせる部活動指導	奈良県立登美ヶ丘高等学校	北野 定雄	71
37	音楽を通して地域に貢献できる生徒の育成	奈良県立片桐高等学校	川北 秀樹	73
その他の部				
38	教師・生徒・保護者 三位一体となった教育活動	奈良県立片桐高等学校	増田 全敏	75

事例番号1 小学校 学級経営の部
言葉、そして、心を育む学級経営を目指して

香芝市立下田小学校 教諭 土橋 郁代

1 実践内容

(1) はじめに

「今日も学校に来て良かった……」という思いを思いを子どもたちに持たせたい。学年当初、担当学年が決まったときにいつもこんなことを考えている。

では、どんなことから、どんな方法で等、“学級開き”をする前に、指導の視点を持つことを大事にしながら……。



(2) 概要

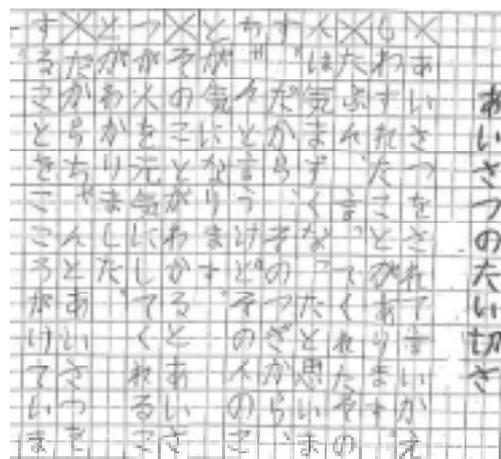
ところで、『学級』とはどうあるべきなのか。少なくとも、子ども同士、子どもと教師のコミュニケーションが図られていなければ、集団での学習・生活ともに成立しないのではないだろうか。しかも、学級集団の基盤は、言葉を核にしたコミュニケーションが図られていることが重要である。それ故に、子どもたちのコミュニケーション能力を高めたいと願って、日々の指導を大事にしている。

そのために、言葉の教科である『国語科』を中心にして、学級集団づくりに必要なコミュニケーション能力を高めるための実践をしてきた。

この実践をする上での指導のポイントは、

毎日、元気の良い「挨拶」を大事にする。

(ここで言う「挨拶」は、時刻に関係する挨拶だけでなく、感謝をあらわしたり許しを得たりすることも含めている。)



「はい」という返事をはっきりとすることを意識づける。

国語科の学習では、学習指導要領の総体である基礎・基本の徹底を図る。

特に、本年度(2年生担任)の重点としたことは、

- ・話すこと、聞くことの指導・・・話すときは、学級のみみんなに声を届ける意

識を持ち、語尾まではっきりと話す。聞くときは、話し手の方にへそを向けて聞く。

- ・書くことの指導・・・視写や書く「型」の指導を繰り返すと共に、他教科、他領域と関連させて、書く機会を増やす。(書き慣れることを)
- ・読むことの指導・・・音読を重視することで、理解力を高める。
- ・言語事項の指導・・・文字は両手でていねいに書く。(右手だけでなく、左手を添える) 反復学習を大事にする。

学習した言葉を他教科や日常生活で大事に使う(実生活での活用)。しかも、対話を重視する。

以上、四つの指導の重点を持ちながら、コミュニケーションが図られることを願って指導を続けてきた。コミュニケーションが成立すること、それは、「言葉を育てることは、心を育てること」とつながることを確信している。

2 成果及び課題

- ・コミュニケーションを図る第一歩は、「挨拶」である。日々、大事にすることで、一人一人が生き生きとし、明るく元気な学級となった。
- ・一人一人の声が、明るくはっきりとなった。
- ・友だちの良さががんばりに目を向けることができるようになった。
- ・根気強く学習や生活に取り組むことができるようになってきた。
- ・さらに一人一人が学ぶ意欲を高め、そして、理解を深める授業の工夫が今後も必要である。
- ・地域や保護者とのコミュニケーションを深めることが、子ども同士の関係もさらに強くなる。



3 その他参考となる事項

<おわりに>

「師弟同行」という言葉があるが、教師自身の言葉へのこだわり、そして、言葉使い等がそのまま子どもたちへ影響するのである。だからこそ、教師自身の言葉を育てることが大切である。何よりも学級経営の核としたい『挨拶』こそ、まず教師自身が率先したいものである。挨拶は、言葉を育て、コミュニケーションを図る特効薬であると考えている。日々の指導の積み重ねこそが、子どもの言葉を、そして、心を育てていくことを確信している。「継続こそ力なり」で、毎日を大事にしたいものである。

1 実践内容

子ども達は、友だちと係わり合いながら、社会性を学んでいくのであるが、学校以外で他者と交わる機会少ない中で、子ども達のトラブルは絶えない。教育相談、特にブリーフセラピー、更にエンカウンターについての技法を取り入れながら、子ども達の生活を見つめ、学級経営を進めてきた。



個人への対応

学級経営においては、学級の雰囲気を作りだすキーマンを大切にすることが必要だ。子ども個人の理解を確実に行なう事が学級全体の向上には欠かせない。それには先ず個人の把握である。教職員の伝達や保護者からの話を大事にすることはもちろんであるが自分の目で見ると、**「ブランク座席表」と「逸話記録法」**をつかう。これらによって子どもの表面には出てこない個性が浮かび上がる。それに基づいて、学級の経営にも幅を持たせ、また保護者への対応も変えていく。

先ず、**「落ち着かず、すぐにきれる。」**と受け継いだA児について知ることを課題とした。A児の特徴から、集中する間は、なるべく邪魔をしない、A児の願いを大事にする、できたこと得意なところで認め、学級にA児の得意な部分を告げる、などに配慮した。更に子どもは自分の事は意外にわかっている。先ず子ども達自身で**「どのようにしたらいいかについて考えること。」**を重視した。クラスの子供達は、教師の対応の仕方も良く見ている。級友のA児への対応の仕方は、教師の対応の様子を見ながら考えるようだ。トラブル時は、子ども達同士での丁寧な話し合いの中で解決できるように心がけた。

次に保護者との対話である。家庭訪問や、少しの機会を通してでも保護者へ働きかける努力をした。その時に教師が先ず、よき話し相手となりながら、専門家の指導を受けることも視野に入れ話を進めた。更に専門機関と教師自身が連絡を取り合えるようにしながら、保護者も相談ができることを伝えていった。また、児童の**「共通理解を深める会議」**で話をし、理解を求めた。

学級全体への対応

低学年では、多くの子ども達が自分の心を表現するための話し方を知らない。**「たたかれたから、たたき返した。」**をよく聴くと、**「手があたって。」**ことがきっかけであるということのように、誤解や対応の仕方がわからないために起こるトラブルが多い。自分が常に被害者であると意識してしまうことも多い。加害者にされた者も理由を説明する**「機会」と「方法」**がわからないようだ。

そこで、先ず授業で**「聞く」「話す」**の基本形を教える。ソーシャルエクササイズの中の**「元気の出る聴き方」**で、聴こうとする気持ちと態度のとりかたを養った。そ

して、朝の会では、「わたしの話」をして自分のことを知ってもらおう機会を作った。さらに、クラスのみならず質問をしてもらう方法から、二人での「対話」による話へと進めていった。また、友だちとの話し方として、ショートエクササイズ「ふわふわ言葉、ちくちく言葉」、ソウシャルエクササイズ「心を伝える話し方」「ありがとうっていいな」などを取り入れ、話をする時には、ことばを選ぶこと、相手に近づき、顔を見て笑顔で分かるように話すことなど、心の繋ぎ方、人間関係の作り方を考えさせた。

このような基本的な日々の指導を積み重ねるとともに、「くらしを重ねて考える国語の授業」に年間3回取り組んだ。

さらに、セルフエスティームを育てるために、児童が自分というものを主張できる場所を設定することも大切だと考えた。自分たちで行なったのだという達成感のあるものを支援することが必要だと考え、クラスで、学年で、学校でとその機会を作っていた。

3 成果及び課題

子ども達の教育は、学級担任の対応が基本にはなるが、何よりも子どもへの共通理解と足並みを揃えた実践が大切である。本校は学年の連携と共に全教職員の協力体制があり、私もその一員としての存在である。A児についても全校の教職員が理解し、その対応について共通の理解が行なわれた。その結果A児について、次の担任に受け継がれ周囲の子どもたちも彼の特徴を理解し始めた。

教師だけの力では解決がつかない部分を多く抱えているのが本校の実情でもある。地域や多くの関連機関と連携をとりながら進めると共に、これからも教室で学ぶ子どもたちのちょっとした言動から、子どもが訴えようとしている信号を受け止めていきたく思う。多くの困難を抱えたり、自分の世界しか見えなかつたりする保護者と子ども達は、ナイーブで壊れやすい。いかにして、社会力を培うか、教育相談を生かした学級経営の必要性が高まりそうである。

4 参考資料

- 中谷伊希子 「基礎的事項の定着を図り、実践力を高める指導のあり方」
奈良県教育センター指定研究 1992.3
- 中谷伊希子 「自分の考え構築へ 基礎的な力育成」内外教育 1998
- 中谷伊希子 「教育相談を生かした子どもへの援助」
奈良県立教育研究収録第6号1999
- 中谷伊希子 「周りの人々との心の繋がりを大切にし・・・」
奈良県教育公務員弘済会 教育論文第8集 1999.7
- 中谷伊希子 「教育相談を生かした子どもへの援助」
日本カウンセリング学会第14回発表論文 2000.1
- 中谷伊希子 「小学校における児童の虐待の実態とその防止」
奈良女子大学修士論文 2000.3

事例番号3 小学校 学級経営の部

学級通信を中核にすえた学級経営について

平群町立平群北小学校 教諭 森口 玲

1 実践内容

4月。始業式が終わって、あたらしい学級担任が発表された後、保護者の間ではいろいろな話題が地域を飛び交う。「先生になったの？ 先生はこんな先生よ。」「先生はいい先生よ。」

私は教職について20年以上経つが、このごろはこのような評判がこの時期に飛び交うようである。「森口先生は、学級通信が山のように出るよ。」



そうである。いつの間にか私のクラスでは学級通信が毎日配られるようになり、その号数は毎年200号近くを数える。はじめのうちは次週の予定を掲載するのが目的で残りのスペースにその週にあった出来事を書き込むと言った程度のものであった。しかしある問題がクラスの中に起こってから毎日のように通信が発刊されるようになり、毎日の通信というスタイルができあがってしまった。そしてこの学級通信を中核に据えた学級経営がスタートしたのである。

そこでここではその学級通信の役割を

学級の様子を伝える学級通信

教材の発展としての学級通信

学級への問題提起としての学級通信

の3つと考えた。

【学級での様子を伝える学級通信】

まず学級通信の大きな役割の一つが家庭への連絡であろう。それと共に学級通信は学校での様子や話題、学習の考え方などを家庭に伝えると言う役割がある。小学校も高学年になると学校での出来事をなかなか家庭では出さなくなる場合が多い。「全然学校のことを話してくれなくて...。」と言った会話が家庭訪問での常のようにさえ感じるのである。そこでこの学級通信を使って学級での子ども達の様子を伝えるのである。

【教材の発展としての学級通信】

二つめの学級通信の役割は「教材の発展」である。授業で学んだことをもう一つ深めたものをここに紹介するのである。これは全員ではないがクラスのうちに何人かがこの話題に興味をもち、自主的な学習として進んで調べ学習などをしてくれることをもくろんでいる。例えばこんなことがあった。「ものが燃えるとき」の単元で酸素や二酸化炭素の学習をしたときに二酸化炭素の身近なものとしてサイダーを学級通信で紹介したところ、子ども達から「作ってみたい。」と言う声上がり、実際に教室で作ったのである。

その何日か後に明日香村への遠足があった。今回は各グループごとにコースを決定して行動すると言うものであったが、たまたま昼食場所で一緒になったグループと昼食後のお

やつをほおばっていたときにある児童がこんなことに気が付いた。おやつの成分である。彼の食べていたのは粉末で口の中に入れるとシュワシュワとなるタイプのお菓子だったがどうやらそれを食べていてその「シュワシュワ」から理科の実験を思い出したのである。そこで早速自分で確かめたのである。

「先生、これってあのサイダー作りの 実験 と一緒やなあ」

「そうやなあ。この『酸味料』っていうのはクエン酸のことや。」

「そうか。ボクは遠足で理科の実験しているぞ！」

これこそが発展的な学習である。実生活の中にある科学的な事柄に対していつも科学の目で見ているからこそこういった活動や観察が生まれたのではないだろうか。



【学級への問題提起としての学級通信】

最後の学級通信の役割は学級への問題提起の場である。学級の中で担任が「おかしい」と感じていることをこの学級通信で紹介することによって、学級の問題として全員に認識してもらう事である。

担任が出張で一日学校を開けたときの事である。専科の授業中での態度が悪かったり、持って来てはいけないものを学校に持ってきていたようであった。そのことを個人的に指導するのも方法の一つであるが私は学級通信で事実を知らせ問いかける方法をとる。これは先にも述べた家庭との連絡にも使われ、家庭でも同じように問題をとらえて考えてもらえるというメリットもある。

2 成果及び課題

毎日の学級通信は教師にとっては大きな負担となろう。しかし私はこの通信を学級の中核に考えて学級経営をしているため、学級活動の中心でもある。毎日、朝の会でこの学級通信を配り、みんなの前で読み上げて内容について少し話をする。そうすることで子ども達とのはじめの会話を共有することができるのである。

これまで発行した学級通信は担任と家庭とそして子ども達の中の大きな架け橋となり、自分の教育理念の家庭への浸透に大きな役割を担っているのである。卒業生が母校を訪れたり、担任と出会ったりすると必ず聞かれるのである。

「センセ、通信はまだ出しているの？」と。

3 その他参考となる事項

参考 HP <http://www1.kcn.ne.jp/~randh> 小学校体育試みの新教材

事例番号4 小学校 学級経営の部

児童一人一人が元気になって力を伸ばすことができる学級づくり

天理市立福住小学校 教諭 綿谷 圭介

1 実践内容

児童が生活面や学習面で力を伸ばすためには、「元気」と「やる気」を持って「自主的」に活動できるようにすることが大切であると思われる。自主的に活動して結果が向上すれば「自信」が生まれ、新たな「元気」と「やる気」につながっていく。このような、「元気・やる気」「自主性」「自信」の循環をつくりだすことができる学級経営の方法を考えた。



(1) 学級の間関係の活性化

自分のしていることに不安があり、傷つきやすく困難を乗り越えることが苦手な児童が多い中、明るく前向きに自信を持ってがんばっていこうとする気持ちを育てるためには、まず明るくて元気な学級の間関係の中でのふれあいを深め、自分がしていることを周りの人に認めてもらえる場を多く作って勇気づけていくことが大切だと思われる。

また、がんばったことに互いに気付いて認め合うことは勿論、普段の何気ない行動やありのままの自分の中にもある「すてきなところ」に気づかせたり、一気に高い目標を目指すのではなく、一歩ずつ「まずはこれでいいんだ」と認識させたりしていくことが必要であると考えます。そのための具体的な方法を以下に挙げる。

担任が率先して学級を明るくし、友だちどうしが交流しやすくするムードをつくる。授業や学習プリントなどでは図やイラスト、または児童が自由に使える学級のキャラクターも効果的に活用し、わかりやすさを追求するとともに学習や活動への意欲付けをする。また、休み時間や自由に活動する時間の児童の様子を観察し、友だち関係の潤滑油になるような役目を心がける。

楽しくて読んでみたくなるような学級通信をつくり、学級での生活や学習の様子、または担任の思いなどを詳しく伝えるとともに、トピックスを学級全員の話(がんばったこと)として共有し、学級と家庭の両面から一人一人の児童や学級の活動を明るく前向きに捉えられるようにする。

自分自身のことを自由に綴る「おしえてあげるノート」への返事(コメント)をたっぷり返して担任の本音をぶつけていくとともに、「自分が書いた文(=思い)」を大切に扱っていく。

帰りの会でスピーチの時間を設定し、自分の思いを話す練習をするとともに、友だちの話聞く姿勢と心を育てる。



グループエンカウターの手法を用い、児童が友だち関係の中で苦手としていることを練習させたり、見過ごしている大切なことに気づかせたりするなど、意図的に「心のふれあいの場」をつくりコミュニケーション能力を高める。またその中で、友だちから自分のことについて話したり考えたりする機会をつくる。

「1日1回全員あいさつ」など互いに目を見て声を掛け合うことを奨励し、「自分以外の16人は、今どこでどうしているの?」ということ意識させていく。

(2) 具体的なレベルアップ

例えばテストならいきなり100点を、運動なら絶対に高い記録や勝利を、ということではなく、まずはがんばったら達成できそうな具体的な目標を設定し、その手だてを考えながら学習するよう支援する。そして、目に見える結果向上の体験を積み重ねていくことで「やればできる」という自信と安心感をつくっていく。そのための具体的な方法を以下に挙げる。

児童や保護者と話し合いながら、生活面における自分の課題を見つけて具体的な目標を設定し、下校前に担任と一日の行動を振り返ってシールを貼っていく。(「がんばりチェック」)

自分に合った学習課題を見つられる教材(ミニプリント)を用意し(特に算数と漢字の学習において)、担任と相談をしながら、自分に合った量とスピードで自主学習を進めるようにする。また、個別に答えのチェックと間違いの指導を行い、「繰り返し練習と答え合わせ」の意識を高めながら自主的に学習するスタイルを身につかせる。(「にがてアタック」)

日々の「おしえてあげるノート」の赤ペン文章チェックによって、正しい文の書き方や作文としての内容の広げ方を指導し、付け足したり書き直したりしながら「自分にもこんなに書けた」という体験を積み重ねさせていく。

2 成果及び課題

楽しい学級のムードをつくりながら児童一人一人の学級における存在感を高め、「やればできる」という体験を積み重ねてきた。そのことによって、「元気・やる気」とそこから生まれる「自信」の循環が少しずつ出来上がってきて、児童に明るい表情が多く見られるようになってきている。例えば、「授業中に手が挙げられるようになった」「机間巡視中にノートを隠さなくなった」「話を聞けるようになった」「勉強がわかってきた(ああそうか、なるほど、の声)」「具体的な目標を意識して生活できるようになってきた」「パニックに陥ってしまわず、落ち着いて学習に臨んだり友だちと接したりすることができるようになった」等の成果がある。

今後は、児童の心のふれあいを更に深め、積極的に関わり合えるなかま関係や居心地のよい学級空間づくりをして、一人一人のがんばりやレベルアップを支えたり認め合ったりしていけるようにしたい。また、わくわくする教材づくりにも努めていきたい。

1 実践内容

児童の国語力を高めることを目指して、これまで様々な場を通して取組を行い、その成果を県下に示しながら日々の教室実践に生かしてきた。

まず、県の国語教育研究会では、研究委員及び作問委員、また、事務局員として様々な教材の研究や授業法の改革について研究を重ね、公開授業や実践記録集にまとめる取組を行った。現在は、事務局員として研究委員会の活動についての運営を中心に取り組み、その成果を冊子にまとめ、秋季研究大会で県内外に広める活動を行っている。

また、高田小学校在職11年間では、校内の研究主任として国語力向上についての推進に努めた。特に、児童のコミュニケーション力の育成を目指して、「話すこと・聞くこと」を中心とした実態把握を大事にしながら教材開発や指導法の改善を図った。さらに、平成15・16年度は文科省の「国語力向上モデル校」を引き受け、研究主任として校内の研究推進に努めた。研究主題を「伝え合う力を高める指導と評価」とし、研究の2年次には公開発表をもち、県内外の先生方や地域、保護者にその成果を伝えた。

現任校磐城小学校においても昨年度から文科省の「国語力向上モデル事業」を受け、市の推進委員としてまた、校内の研究主任として、「読書力を高める指導法」に視点を当てて取組を進めている。

以上のような経験を生かしながら、学級の国語教室では、言葉を通して「伝え合う力」を育成するために以下のような重点課題を掲げて実践に取り組んできた。その一端を紹介する。

重点目標

- ・国語力をすべての教科・領域で高めるために、年間指導計画の充実を図る。
- ・他教科・領域と関連させながら、「話すこと・聞くこと」、「書くこと」、「読むこと」の力を高める教材開発を図り、指導方法の改善を図る。
- ・読書習慣を身に付けさせ、読書力の向上を図る。
- ・個に応じた指導と評価の一体化を図りながら、一人一人を生かす授業を目指す。

実践例

対話力、独話力を高める「1分間スピーチ」の学習（全学年）

- ・学年に応じた話題の開発 ・スピーチメモ、聞き取りメモの指導 ・モデルの作成と活用（スピーチ名人秘伝の技作成）

相手・目的意識を明確にした「書くこと」の授業（中・高学年）

- ・他教科との関連を図った教材開発 ・取材から記述までの指導と評価の工夫



(例)「教え合おう! 体のひみつ」(4学年)・「動物図鑑をつくろう」(5学年)
 児童が自ら課題をもち、主体的に読み進める授業 (高学年)

- ・個の課題に応じた一人読み
- ・個が選択できるワークシートの工夫

(例) 「ちかい」(東京書籍5年下)・・・文学的文章の課題読み
 学校図書館を活用した授業づくり (高学年)

- ・テーマにそったブックトークの学習
- ・他教科と関連させた読書指導の追求

(例)日本の農業について考えよう(パネルディスカッション)・・・社会科
 読書に親しませながら、多読へと広げる日常の取組

- ・15分読書の継続
- ・読書のれん
- ・ブックウォーク

ブックウォーク

日付	本の題名	作者名	読み時間	感想
4/24	おはなしのけいふ	中沢実治	350	
4/25	ちかい	...	20	
4/26	イネさん	...	182	
4/27	スーパ	...	20	
4/28	キキの3可	中沢実治	350	
4/29	ウーリーの集会	...	20	
4/30	フクは友達	...	20	
5/1	ちいさな空	イルカ	20	
5/2	宝魚がにげた	五味太郎	15	



【読書のれん】一人一人が読んだ本について 題名や一言感想をカードに書いてのれんのようにつなぐ。

2 成果及び課題

- ・児童の言語実態を明らかにしながら年間計画や指導方法・評価方法を見直すことで、児童に付けたい言葉の力を明らかにすることができ、日々の授業を意図的・計画的に行うことができた。
- ・「読書力向上」を目指して様々な教材開発や指導法の工夫を図ることで、学校図書館の活性化を図ることができ、本を楽しんで読む児童が増えてきた。
- ・すべての児童の国語力を向上させていくという点から、個に応じた指導と評価の工夫を図るとともに、「魅力ある授業」を構築するための指導法の研究を重ねていくことが課題となる。

3 その他参考となる事項

参考資料

- ・実践報告「相手意識を大切にした説明文の指導～教え合おう! からだのひみつ～」
 全国小学校国語教育研究会発表資料(代 分科会)・・・4学年
- ・実践報告集「生きて働く国語の力を育てる授業の工夫」・・・(株)ニチブン
 「子どもたちのよさに気づくための評価活動の工夫」
 第14巻・・・学習指導の改善と評価の在り方 より
- ・平成15・16年度 文部科学省指定・国語力向上モデル事業研究収録
 「話すこと・聞くこと」を高める指導を評価 ～平成15年度～
 ことばの力が身に付く指導と評価 ～平成16年度～
 (大和高田市立高田小学校)

事例番号6 小学校 生徒指導の部

問題を抱えた子どもたちに寄り添い、職員みんなで課題を共有して取り組む
生徒指導について

平群町立平群西小学校 教職員集団

代表 教諭 上田 毅

1 実践内容

・西小学校の子どもたち

平群西小学校は、児童数150人、全学年単学級である。子どもたちは、全体的に明るく人なつこく、活発であるが、言葉遣いや人に対する態度は、指導が必要なことが多い。また、落ち着きがなく、学習面での集中力や人の話をしっかり聞く態度に課題が多い。



また、子どもたちの中には、保護者や家庭のかかえる問題で、日々の生活に不安を感じたり、自分に自信がもてず、そのストレスをまわりの人に反抗的な態度で出したり、非社会的行動や、無気力な態度で出している子どもたちが少なからずいる。

・しんどいものを抱えた子どもたち

子どもたちの中には、いろいろな面で家庭の状況が厳しい子どもたちが多い。

高学年の何人かの子どもたちは、学習をはじめ学校生活のすべてにわたってやる気をなくし、反抗的な態度をとったり、極端に甘えたり、授業を妨害したり、教室から抜け出し学校中を徘徊したり、暴言を吐いたり、ふざけて学校のルールを平気で破ったりした。毎日いろんなことが起こっていた。下校後も、自分の安心できる居場所がなく、すぐにケンカしたりする子もいた。体の不調や心のしんどさを訴え保健室へ行く子も多かった。

・「担任だけで抱え込まない」職員集団みんなの力で

私たちは、そんな子どもたちへの対応に、毎日朝から晩まで走り回った。もう、担任の先生だけでは、対応しきれないことも多かった。まず、職員朝礼や学年部会(月曜日)で、気になる子どもたちの家庭や学校生活の様子を報告し合ったり、日々起こった問題の経過や指導の方針を共通理解し合った。また、特に5年生、6年生の子どもたちへの指導の仕方については、学級担任(障担)をはじめ教務、人推、専科、養護教諭、校長・教頭が、度々校長室に集まり、日々の現状把握と指導方針の確認を行った。

日々の授業を大切にしていくために、また、すべての子どもたちがクラスの中で安心して生活できるようにしていくために、担任、障担は、専科の授業を含めて、一週間全時間クラスに張り付いた。人推をはじめ、空き時間の先生も、5・6年の授業の中に入り込んで指導したり、教室を抜け出そうとした子どもたちに、きちんと話を聞き、教室へもどすといった指導を続けた。保健室や校長室では、体の不調や、心のしんどさを訴えてくる子どもたちに対応できるよう、一人ひとりの話を聞いてやれる場にした。まさに、全職員が、共通理解し、指導のめあてをもって、取り組んでいったのであった。

・子どもたちの生活に寄り添う生徒指導(家庭や地域とつながることから)

問題をかかえた子どもたちへの対応は、学校の中だけで指導しきれものではない。当然家庭との共通理解と協力関係が大切である。担任、障担、人推は、何度も何度も気になる子どもたちを家庭訪問し、おうちの人と、子どもがかかえているしんどさや家庭

のしんどさ、これから私たちが、おうちの人と共に指導していく方向性などについて話し合った。子どもたちが「また明日も、学校へ行こう!」と思ってくれることを願って。

また、ほぼ毎日、電話や連絡帳で、日々の学校での様子を伝え、家での様子や学習、遊び、忘れ物などについて、連絡を取り合ってきた。私たちは、日々のコミュニケーションを通じて、家庭との信頼関係を築いていくことを一番大切にしてきた。

我が校では、PTAを始め、保護者や地域の方々の協力が、各地域での生徒指導をはじめ、毎日の集団登下校、生活科や「わくわくタイム」での地域の教材化、お年寄りとの交流など・・・大きく学校運営を支えてくださっていることは確かである。

さらに、私たちは、下校後に行き場のない子どもたちが何か活動する場を作っていく必要を感じた。

そして、秋の球技大会にむけて、放課後、子どもたちを学校に集め、野球の練習に取り組ませた。いつもは、やんちゃな子どもたちも、キャッチボールから始めて、ノック、各ポジションの守備練習、順番にバッティング練習・・・と、一生懸命運動場を走り回り、楽しそうに練習に励んでくれていた。

2 成果及び課題

・そして 新たな一年が始まった(卒業しても学校に顔を見せる子どもたち)

6年生が卒業した。卒業式前には、少しずつ落ち着きを見せ、保健室にもあまり顔を見せなくなっていた。今まで掃除をさぼってばかりいた子どもたちも、6年生の愛校作業の時には、体育倉庫や一輪車倉庫をほこりだらけになりながら、最後まで一生懸命掃除をし、道具をきれいに整理整頓してくれている姿があった。そして、卒業後も、事あるごとに学校に姿を見せ、職員室や運動場で楽しそうに遊んでいる子どもであった。

新6年生は学校のリーダーとなった。だいぶん落ち着いて授業が受けられるようになりつつある。昨年荒れをみせた子や、学習意欲をもてなかった子も、与えられた課題に取り組めるようになり、発表したり意欲も見せてくれている。教室を飛び出していく子はなくなった。子どもたちは、少しずつ自信をもてるようになってきたのだと思う。

・「ふれあい教室」の活動を通して

放課後の、子どもたちの地域での活動を、より押し進めていくために、西小学校の全職員が順番に参加して、「子どもふれあい教室」をたち上げた。地区の人権交流センターを活動場所にして、学習の補習、創作活動やスポーツ活動、体験活動など、1年生から6年生までが、協力して楽しみながら学ぶことができる場を作ろうと取り組んでいる。参加してくれている児童は、日頃のやんちゃな子どもたちが多く、学年を超えリーダーとして、意欲満々に活動してくれている。

・教師集団の課題

この2年間「しんどいからこそ、みんなが心一つにしてまとまる」私たちの職場では、これを実践してきたように思う。まだまだ、子どもたちの家庭や生活のしんどさがなくなったわけではない。「この状態でよく頑張って学校へ来てくれている」と思える子どもたちがたくさんいる。しんどそうな顔をして登校してくる子どもたちに、なんとか元気な笑顔をとりのどしてほしいと考えている。

子どもたちが笑顔で学校生活を送れるように、私たち全職員が、常に話し合い、子どもの現状を細かく把握し、力を合わせて指導にあたることを大切にして、これからも子どもたちに向き合っていきたい。

1 実践内容

(1) はじめに

今や児童を取り巻く社会環境は、子どもや家族にとって安全感や安心感が持ちにくいものとなっている。また、多様な価値観が認められる社会ではあるが、一方氾濫する情報の中で、私たちおとなも子育てや教育に「難しさ」と「不安」を抱えながら暮らしていると言えるのではないだろうか。学校現場においても教職員は、子どもたちの学校生活及び家庭生活にもアンテナを張り巡らし、様々な情報を収集しながら児童への理解と援助に当たっている。しかし、上記に述べたような状況の中で解決が難しい事も多々ある。教職員が心身共に疲れ、指導方法に迷い自信を失うことは、教師自身の心身の健康を害するだけでなく、学級経営や教科指導に影響を与えると考える。そこで、教職員がざっくばらんに個々の取り組みを報告したり、悩みを語り合ったりしながら互いに助言し合う場が必要であるという考えのもとに立ち上げられたのが、「教職員の教育相談部会」である。



(2) 取り組みの概要

開催日 月1回 第1月曜日 午後4時から

場 所 保健室

参加者 保健部(2名)、人権教育部(1名)、生徒指導部(1名)
その他(自由参加)

内 容

- ・気になる子どもについて具体的に事例を出し合う。
- ・教職員の立場の違いによる子どもとの関わりで知り得ている情報を提供し合い、対応についても共通理解する。
- ・経験やアイデアなどを出し、助言し合う。

(3) 「教職員の教育相談部会」の様子

月初めの月曜の午後4時。保健室には、「日々の子どもの様子について話そう」「子どもの抱える問題と関わりについて聴いてもらおう」「子どもへの対応についてアイデアを聞いてみよう」「話を聴こう」「共にこどもを支えたい」・・・と思って参加する教師が集まってくる。およそ10人ほどの集まりとなる。教師自身が安心感を持てるような和やかな雰囲気である。およそ1時間という限られた時間なので、1~3人くらいの気にかかる子どもの様子について話し合う。担任からの具体的な事例や思いを聴くと共に、様々な立場で関わりのある教師、直接関わっていなくても校内で出会ったときの様子や子どもの表情から感じ取ったこと等を出し合う中で、子どもの姿がより見えてくる。また、子どもを取り巻く周囲の人々の思いにも心をはせてみる。そして、それぞれの教師が自分の経験を話したり、感じたり思ったりしたことを出し合い助言し合う。このようなことを通して、具体的に何ができるかを考え共通理解を図りながら、日常の中で多くの教師がその子を気にかけて、声をかけたり自分にできる関

わりを積極的に持っていき事を確認する。さらに、継続して経過を見ながら指導の方向を見直していく。

2 成果と課題

・今、子どもたちには、自分を守り、自己を肯定して生きるために、自分の体や心にとって大切なもの知り（感じ取ったり、気づいたりして）、自尊心を基盤に自己決定力（選択する力）を身につけていくことが必要であると考え。この基礎となる自己肯定感、幼い頃から家族や学校、地域のおとなに見守られ「大切にされている」と実感する体験をたくさん持つことであるが、それはまさに、子どもたちが私たち教師に日々出し続けているサインであり、子ども自身が一番求めていることなのである。

「教職員の教育相談部会」において月に一度、日頃ちょっと気になる子について話すことは、早期に子どものサインを多くの教師が受け止められる機会となっている。そして、直接関わっていない子どもにも目を向け、自然に声をかけたりスキンシップを持つことで「あなたが大切だよ」メッセージを伝えることにつながっている。

・教師自身にとっては、「話す」と共に「聴く」ということを通して、信頼関係が密になったのではないだろうか。それが、日常気軽に相談し合えたり、互いに支え合える雰囲気につながっていければと思う。さらに、子どもの多様な姿を知る中で子どもが置かれている立場や思いが見えてくるようになったり、様々な具体的な指導方法を出し合い方向性を探っていく事でよりきめ細かな支援ができるようになった。

・教師自身の多忙さが年々増している状況で、自主的参加である「教職員の教育相談部会」を継続していくこと自体が課題である。しかし、幸いにも時間をとり参加する教師がいる。私は、互いに学びあい支え合うこの機会の必要性を感じこれからも一人ひとりの教師を尊重し、緩やかにこの輪を広げていきたいと思う。

・本校の教育相談体制は、「教職員の教育相談部会」の他、緊急に対応していく必要がある場合には、管理職を含めた関係者によるケース会議で問題解決のための具体的な援助方法の話し合いがおこなわれている。また、年2回教師全員の共通理解を図る実態報告会、事例研究会等、様々な機会を通して児童理解と援助の検討をおこなっている。このように、幾重にも子どもを見つめる機会を持つことが必要である。

今後も「教職員の教育相談部会」が、チームとして組織として子どもたちの成長を見守り精神的な支えとなるための十分な機能が果たせるよう、よりよくコーディネートしていくためにさらに私自身を見つめ自己研鑽を積み重ねていきたい。

3 その他参考となる事項

平群町立平群南小学校ホームページ <http://www1.kcn.ne.jp/~heguri-s/>

事例番号 8 小学校 特別活動の部

「豊かな人間性」をはぐくむ特別活動の創造

- 生活に生きて働く力をはぐくむ学級活動をめざして -

香芝市立下田小学校 教諭 吉野 隆博

1 実践内容

特別活動の基盤である学級活動は、望ましい集団活動を通して「どのように行動することが望ましいのか。学級や学校生活をより充実させるにはどうしたらよいか。」を友達と協力し合いながら知恵を出し合って、よりよい生活を築いたり、生き方を学んだりする。子どもたちの生活を起点とし、子どもたちが自らの生活をつくり出し、よりよいものへと変えていこうとする「生活に生きて働く力」をはぐくむ学級活動をめざし、本研究に取り組んだ。



(1) 一年を見通した学級活動年間指導計画を作成する

学校の学級活動年間指導計画に基づき一年間を見通した学級経営と集団の成長に合わせた話し合い活動の指導過程を踏まえて、本学級の学級活動年間指導計画を作成した。

(2) 生活を見つめる活動の場や機会を設定する

「夢や希望のもてる学級にしたい。そして、今日も学校へ来てよかったとそう誰もが思える学級にしたい。」と考え、子どもたち一人一人の思いや願いをもとに話し合い、学級目標を立てた。

一日を振り返り感じたことや思ったことを数行綴る『一言日記』を作り子ども理解に努めた。

担任は、学級内の子どもたちの様子を絶えず観察してはいるものの十分見きれてない部分もある。班長を中心にした生活班を大切に、しんどい思いをしている友達へのかかわりをはじめとして互いに高め合う集団づくりを進めた。

学級活動において、子どもたちの自主的な活動を充実させるための学級会はもちろんのこと、内容2の「日常の生活や学習への適応及び健康や安全に関すること」についても、資料の作成や話し合いの司会など子どもたちの手に任せられるところではできる限り任せることにした。

(3) 家庭・地域社会の生活との関連を図る

5年生では『環境』、6年生では『平和・人権』をテーマに、各教科、道徳、特別活動、総合的な学習の時間を横断的・総合的に結び付け、自分の生き方や考え方を振り返る学習活動を試みた。

子どもたちに自分のよさや可能性に気付かせ、そのことに自信をもたせる手立てとして、よさや可能性を認めていくことが大切である。連絡帳や学年だより、学校行事等の機会を通して子どもたちの様子を伝える場や機会を大切にしたい。

(4) 学級活動の実際（第5学年）

議 題 「家の人への感謝の集いを計画しよう」

議題設定までの経過（略）

本時のねらい

家の人へ感謝の気持ちを伝える方法について、実践につながる話し合いを進める。友達の意見をしっかりと聞き、自分の考えを深めながら、話し合いに参加する。自分たちが楽しむのではなく、家の人を楽しんでもらえるような感謝の集いを考えたいという提案理由に基づきながら見通しをもって話し合いを進める。

展開（活動計画）

第15回 学級会の計画		11月11日火曜日 第3校時
議題	「家の人への感謝の集いを計画しよう」	
提案者		
提案理由	家の人に日ごろの感謝の気持ちを伝えるとともに、家の人を楽しんでもらえるような集いをみんなで協力して行いたい。	
役割	司会（ ） 黒板記録（ ） ノート記録（ ）	
話し合いの順序	気を付けること	
1 はじめの言葉		
2 議題の確かめ	・感謝の集いは12月4日（木）5校時に行く。	
3 提案理由の説明		
4 話し合いのめあてと柱の確認		
5 話し合い 家の人に感謝の気持ちを伝える贈り物は何がいいか。 仕事の分担をどうするか。	・自分の考えに理由付けをしてはっきり言う。 ・みんなが協力して準備ができるように計画する。	
6 決まったことの発表		
7 先生の話		
8 終わりの言葉		

2 成果及び課題

(1) 研究の成果

一年間の学級経営を見通しながら、夢や希望の語れる学級風土を育てることは、日常生活に生きて働く力を培う。

家庭や地域社会の生活との関連を図り、横断的・総合的な活動を展開することにより子どもの学習に広がり生まれ、学級活動の指導の視点が明らかになる。

(2) 今後の課題

学級活動は、キャリア教育の推進においても人間関係形成能力や意思決定能力の育成に不可欠である。話し合い活動だけでなく、係の活動や集会の活動。また、特別活動の他の内容。さらには各教科等も含めた教育活動全体について、具体的な生活の中でどのような態度や技能を身につけさせていけばよいかを明らかにし、内容の重点化を図る必要がある。

3 その他参考となる事項

本実践は前任校の宇陀市立大王小学校（現宇陀市立榛原西小学校）の取組である。

「学級活動ってなあに - 学級活動の手引書 - 」 奈良県小学校特別活動研究会著

事例番号 9 小学校 総合的な学習の時間の部

斑鳩町内小学校の総合的な学習活動の具現化に向けて

斑鳩町立斑鳩西小学校 教諭 上田 昌功

1 実践内容

社会科副読本 わたしたちの町「斑鳩」からの出発

斑鳩町は、世界文化遺産の法隆寺や藤ノ木古墳等文化財の宝庫である。また北には矢田丘陵、東には富雄川、西には龍田川、南には大和川といった山と水に囲まれた地にある。その地に住む児童や保護者は、四季折々の景色や文化財と共に生活しているのである。

小学校第3学年社会科副読本わたしたちの町「斑鳩」を作成するにあたっては、自ずとしてこの斑鳩の里を意識し、郷土を愛する心を育てることも念頭に置いている。発展的な児童の活動として総合的な学習に向けての想定を考え、監修・編集している。

校区を歩いて見つけ、いろいろな方々との出会いと協力のなかで進められている学習について述べる。地域に生きる子どもたちに価値ある体験を幅広く積み重ねながら学び方も身につけてほしいという願いと子どもたちが意欲をもって取り組みそうな活動を支援するよう心がけている。

教務として具現化するため、学年、ゲストティチャー（指導者）、学校内、地域協力者との調整等を進めた。

実際の動き

第3学年

能「金剛流」との出会い ～斑鳩小～

斑鳩町（旧龍田町）の龍田神社のなかに能「金剛流」発祥の地という碑がある。毎年、能の奉納が行われている。この伝統芸能を児童が体験できないものか、児童の「能って何だろう」というところから京都の金剛流宗家に伺いを立てた。子どもたちが総合的な学習として取り組むことに賛同を得て、奈良金剛会主宰植田恭三氏のもとを訪ねた。

一度に約130名の児童を対象に指導ということや全国的にも学校独自で実施していることを聞かないということもあり驚かれた。いかるがホールで能講座を開講されていること、子どもたちに伝統芸能を伝えたいという主宰の大きな理解と当局の支援、また教師集団の心一つにした行動のもと総合的な学習として能「金剛流」の謡と仕舞を学ぶこととなった。

礼儀作法から学ぶ「能」の指導は現在も3学年で学び、4学年からはクラブ活動として卒業まで町内をはじめ県内各地で活動を続けている。

第3学年

農業体験「なし作り」を通じて学ぶこと ～斑鳩西小～

稲葉車瀬・神南という地は、川に近く砂地という立地で「なし（幸水）作り」が盛んなところである。通常店舗には出荷しないで販売している。もともと地域協力が頂ける素地があった。おいしい「なし」はどのように作られるのだろうかという疑問からスタートした。学校は、梨畑に囲まれているという条件のなか奈良県JA斑鳩生活改善グループ婦人部の協力で「なし作り」の1年を体験している。春には、梨の白い花を見、受粉、摘果、秋の収穫等の体験を基本に話を聞いたり、ジャム作りを一緒にしたり農業・調理体験を地域のJA婦人部生活改善グループの方々と共に学んでいる。地域の方と一緒に汗することで斑鳩の農産物として特色ある「なし」で農業と自然との生活を大切に考える



人の輪が毎年広がっているところである。

2 成果と課題

斑鳩の社会科から発展した総合的な時間の取り組みとして、地域に根ざしたものを基に学習を展開させることで自分の町をより深く知り、郷土愛がうまれる。そして人と人のつながりが広がり、関わりの中で「生き方」に通じる価値ある体験の場のもたらすことができたと考える。



礼儀作法から始まった「能」や「なしの花」を見て、知ることから始まった農業体験は、緊張、喜び、つらさ、感動等子どもたちの心に斑鳩のよさをより明らかにすることができた。また、体験を通じて新たな自分を見つけていこうとする姿も生まれてきた。斑鳩町は世界最古の木造建築である法隆寺という世界遺産を持っている。地域学習の中から、今「地域のために活躍した人」という視点で第4学年では、新しい地域教材として名誉町民第1号である宮大工「西岡常一さん」への接近を試みた。ビデオやかんな等の使い方の体験・木の香りを通じて、NHKや西岡さんのご子息の協力を得て社会科と総合的な学習を組み合わせながらその人の生きざまに学び、郷土のことを調べながらより斑鳩を愛する児童の育成を試みている。

しかし、これからの社会情勢に対応するためには、変化を正しくとらえ、望ましい意志決定による主体的な選択ができ、新しい課題について適切に対応する能力や態度の育成がますます大切になってくると考える。

課題として、上記の事柄を子どもどう生活のなかに生かしていくべきか、学校のアプローチの限界と指導者等継続するための人のネットワークをしっかりと組み、今後もどのような教材開発をすべきかいろいろな観点から感性を磨きながら地域を見つめ総合的な学習を見ていく必要がある。

3 その他の参考となる事項

< 各種研究会団体等の役員 >

全国小学校社会科研究奈良大会事務局総務会計担当	昭和61年・平成6年・平成17年
奈良県小社研事務局総務担当	昭和61年～現在
奈良県教育番組専門委員	平成2年～4年
文化庁諸職調査委員	平成3年～5年
斑鳩町体育指導委員	平成5年～現在
斑鳩町教育委員会 わたしたちの町「斑鳩」副読本編集委員会監修編集委員	平成2年～現在
斑鳩町人教事務局長	平成10年
特別支援教育コーディネータ	平成17年～

< 実践発表等について >

全国小学校社会科研究奈良大会	提案	昭和61年
全国放送教育研究和歌山大会（社会科）	提案	平成4年
近畿学校行事研究滋賀大会	提案	昭和56年
県教育研究所10ヶ年研修講座（学級経営）	実践発表	平成2年
県教育研究所初任者研修講座（社会科）	実践発表	平成4年
県指定研究員（特別活動）		昭和58年
県教育センター特別活動研修講座	実践発表	昭和59年
奈良県教育振興会夏期教育セミナーシンポジスト		平成14年

事例番号10 小学校 総合的な学習の時間の部

地域の伝統文化を学び豊かな心を育む取組について

斑鳩町立斑鳩小学校 教諭 小野 英子

1 実践内容

斑鳩小学校は、世界文化遺産「法隆寺」や「藤ノ木古墳」等数々の歴史遺産と「竜田川」等の自然がうまく調和した町の中心部にある。斑鳩町は聖徳太子ゆかりの地であり、「和」の精神を尊び郷土を誇りに思う豊かな心を持つ子どもたちを育む取組を推進している。また、校区にある竜田神社には世界無形文化遺産に登録された「能」の一つである「金剛流発祥の地」の石碑が建立されている。地域の伝統芸能「能」の体験学習を通して、自分たちの町の歴史や文化に関心を持ち郷土斑鳩を愛する子どもに育ててほしいと願う。



ここでは総合的な学習の時間に取り組んだ3年生の活動について紹介する。

社会科で

3年生になると社会科で自分たちの住んでいる地域の学習が始まる。そこで町探検の時、竜田神社に行って「金剛流発祥の地」の石碑を見学した。子どもたちは立派な石碑を発見して驚いた様子だった。地域に伝わる文化や歴史に対して強い興味・関心を持ち「能」との出会いを新鮮に感動的にすることができた。

総合的な学習の時間で

「能」の学習は金剛流能楽師主宰の植田恭三先生の指導を受けている。「能」の学習の時間、体育館で正座をして待つ子どもたちはいつも緊張と期待の表情である。挨拶の仕方・座り方・立ち方・歩き方の稽古から始まり、本格的な謡の声の出し方、舞では扇の持ち方・足の運び方等次々と学習が進んでいく。子どもたちは先生の手本を見て、必死についていこうとしている。このように稽古を繰り返し練習を重ねていくうちに最初ぎこちなかった動きもだんだん「能」らしくなっていった。

「能」との出会いは植田恭三先生との出会いでもある。謡や舞の技術的な習得だけでなく、挨拶・礼儀・けじめを「能」の指導の根底におき、常に子どもたちに振り返らせる。これは「能」だけに限らず言葉や心、人とのかかわり合いの基盤でもある。「能」の時間は、子どもたちに決して気を抜かず和の心を伝えようと熱心に指導される意気込みが自然に子どもたちに伝わり、それに応えようと真剣に励む子どもたちとの心地よい緊張の場となった。

らんらんフェスタで

本校では毎年11月の「らんらんフェスタ」(日曜参観)で保護者や地域の方々の前で3年生が「能」を披露している。この日は全員足袋をはき、ゆかたと帯を身に着けてあぜやかに登場する。学習の一つとしてゆかたや帯も一人で着られるように、事前に練習を行った。いつもと違う自分たちの姿に子どもたちは生き生きとした表情で堂々と発表することができた。保護者からは、「活動的な3年生に落ち着きが求められる能を課題にすることはとても良い経験だ」や「親でも教師でもない威厳ある大人から一つのことを

習うのはとても豊かな経験だ」という感想をもらった。

道徳で

道徳の時間「ふるさといいとこさがし」(東京書籍)の教材を使って、地域のよさを発見し郷土を大切にしようとする心情を育てることをねらいとして学習した。1学期の地域学習を思い出したり自分たちが取り組んでいる伝統芸能を考えたりして活発に意見が出た。その中で「3年生が能の学習をしている小学校がある町」「やさしい心の人が多い町」「楽しいことがいっぱいある町」という意見が出た。歴史的・文化的な建造物に目がいきがちな子どもたちがしっかりと地域の人々の願いに気づいてくれていた。また授業参観の時に学習したので保護者の意見を聞くこともでき自分たちの郷土を考える時間になった。



2 成果及び課題

- ・「能」の練習を重ねることで、3年生なりにそれらしい動きができるようになった。伝統芸能という日本文化に出会い、継承している人から直接話を聞き、指導を受ける機会があるということは、「能」を伝えようとする「人」の生き方を学ぶことでもある。幾時代もの間、人々の心を打ち脈々と受け継がれてきた伝統芸能を自分たちが体験していることに、子どもたち自身が感銘を受け真剣に学んでいる姿があった。伝統の重み、日本語の美しさは豊かな人間性を育む基盤になり、普段意識しない日本人の心や言葉の力を感じることができた。また意味の解釈や文法を理解することより、何度も何度も声に出して暗唱することで丸ごと「能」を味わい、自分の国の歴史や文化を継承している実感があり、意義のある学習になった。
- ・姿勢を正し長時間正座して、腹の底から声を出す発声練習は国語学習の音読や朗読にも生かされ、全校で取り組んでいる群読集会の時にも大きな口を開けて、暗唱することができた。普段の授業においても落ち着いて学習に取り組む姿が見られ、集中する力を身に付けることができた。
- ・道徳で「ふるさといいとこさがし」の学習をした時、子どもたちは今までの学習を思い出し、斑鳩町のいいとこ発見をたくさんすることができた。感想には「斑鳩町に生まれてよかった」「こんなに自まんでできることがいっぱいあってとてもうれしい気持ちになった」と書いている子どもが多くいた。
- ・「能」学習から子どもたちに付けたい力を教師が共通理解し、伝統芸能の奥深さと魅力を子どもたちといっしょに楽しむことができたのは学年教師集団が協力できたからと考える。様々の教育活動を学年グループで相談し実践できることは学年の子どもたちの意欲を高め、関係作りをより豊かにすることができる。最後にこのことに感謝したい。

3 その他参考となる事項

本校のホームページアドレス <http://www4.kcn.ne.jp/~ikarugac>

事例番号11 小学校 障害児教育の部

特別支援教育に向けての「ことばの教室」の取り組みについて

平群町立平群東小学校 ことばの教室 教諭 村井 敏宏
教諭 中尾 和人

1 実践内容

本教室は、平成5年の学校教育法施行規則の改定を受けて、平成10年に平群町立平群東小学校内に設置された通級指導教室である。通級対象は、生駒郡内の通常学級に在籍し、発音が正しく習得されていない（構音障害）、言葉が流暢に話せない（吃音）、言葉の発達が遅れている（言語発達遅滞）等の児童生徒である。指導は、基本的には毎週1回1時間、在籍学級の授業のない放課後に個別指導の形態で行っている。また、障害の早期発見、早期教育の観点から就学前の幼児に対しての教育相談も行っている。



構音障害、言語発達遅滞で通級する児童の中には、軽度発達障害（LD、ADHD、高機能自閉症）と思われる児童が多く含まれ、最近では主訴の障害に対する指導だけでなく、軽度発達障害を対象にした指導が増えてきている。

LDは、文字の読み書きに困難を示す障害である。小学校低学年のころは逐語読みや文字の想起に時間がかかる、鏡文字やマスに文字が納まらないなど文字の習得に遅れが見られ、学年が進むと文章の読みの困難、漢字の読み書きに困難を示す。また、高学年になると学習全般に困難さを持つようになる。「ことばの教室」では子どもの認知の特性をふまえて児童に合った教材を作成し指導を行っている。

ADHD児は、注意集中に困難を示す児童である。学級では多動のため授業中の離席や多弁などで授業妨害をしたり、不注意で指示を聞き落とししたり、ケアレスミスが多いなどの問題行動がみられる。「ことばの教室」では注意集中を高めるためのワークを行わせる、障害の特性に応じた学習方法を身につけさせる指導を行っている。また、応用行動療法を基盤にした子どもとのかかわりかたについて保護者指導も行っている。

高機能自閉症は、コミュニケーション能力、対人関係に困難を示す児童である。学級では友達とのかかわりがうまくできないため、いじめの対象になったり、不登校になったりすることが多い。「ことばの教室」では、ソーシャルスキルトレーニングを基本にしたワークを行っている。

これらの指導にあたっては、WISC - などの各種検査を行い児童の認知特性を踏まえて指導計画を立てている。児童一人一人の認知特性などが様々であるため、教材は児童の実態に合わせてほとんどが自作教材である。また、児童の指導を効果的にするように担任の先生との連携（担任連絡会）も行っている。

以上のような児童に直接行う指導や担任との連携以外に、多くの先生方に軽度発達障害を理解してもらうため、自校・他校の教員研修や教員対象の研修会に講師として参加している。

ことばの教室指導教材一例	
教材・ゲーム名とねらい	内容
ひらがな表・カード 音と文字の対応	文字とその文字に対応する絵が印刷された表・カード。文字の表記が定着するまで、カードを携帯し、表記の助けとする。
に入る文字は何？ 文字の読みの定着	一文字が隠されている単語が印刷されたワークシート。前後の文字からその単語をあてる。
ひらがなで書こう 書きの定着	パワーポイント教材。画面上に現れた絵の名前を文字で書く。画面を進めることで間違いを自己修正する。
単語探し 単語の読みの定着	無意味なひらがなの羅列の中に有意義な単語が隠されたワークシート。有意義な単語を探す。
何を食べた？ 視空間認知力の訓練	用紙の左側に5匹の動物、右側に5種類の食べ物が配置され、それぞれを曲線で結んだワークシート。曲線を目で追い、どの動物が何を食べたか探す。
言葉で覚える漢字 視覚情報を音声情報に置き換える	漢字をいくつかのパーツに分けて、それらを音声情報に置き換えて漢字を覚える練習ワークシート。

2 成果及び課題

現在、各校で進められている特別支援教育に向けての取り組みの中で、「ことばの教室」に相談をされる学校が増えてきている。このことは、「ことばの教室」の取り組みが特別支援教育の中で大切であると認知されているからであろう。また、担任連絡会を通して連携することで担任が通級している児童だけでなく、学級の中で支援の必要な児童に気づき、配慮した指導ができるようになってきていると思われる。

一方、通級希望児童が多いが「ことばの教室」の対応人数の限界のため対応しきれない場合がある。教室増や担当者増などが求められる。また、現在は小学生しか対応できていないが、今後は中学生に対しても指導できる体制ができることが望まれる。通級指導を効果的に行うためには担任との連携が重要であるが、「ことばの教室」での指導時間が放課後であるために連携をとりにくいことも課題である。

1 実践内容

(1) はじめに

本校の子どもたちは、明るく素直で与えられた課題には粘り強く取り組むことができる。しかし、自分で課題を見つけたりみんなの前で発表したりすることに自信のなさがみられる。特に、自分の思いや考えを相手に伝えるとき、はきはき言わなかったり、最後まできちんと話さなかったり、単語だけですましてしまったりすることが多い。

そこで、自分の考えをしっかりと、自分の言葉で伝えようとする子ども、自信をもち生き生きと表現する子どもを育てていきたいと考えた。



(2) 具体的な研究課題

学校生活の様々な学習場面において表現力を高めるにはどうすればよいか。

「ふるさと」のよさを生かし子どもたちに主体的な力や自信、ふるさとへの愛着や誇りを高めるにはどうすればよいか。

多くの人々とのかかわりを通してコミュニケーションの楽しさや能力を高めるにはどうすればよいか。

(3) 取組

基礎基本の定着と表現力を高めるための全校での取組

ア 学級朝タイムの活動（ドリル学習や読書）

・基礎基本の定着と読書習慣の育成を目指して取り組んでいる。

イ 水曜集会（各委員会や各学級からの発表、全校詩の群読、今月の歌）

・学習活動や特別活動の発表の場と音声表現力育成の場として全校みんなで取組を進めている。

・発表においては、「聞いている人によく分かるように」を意識しながら、劇化、ペープサート、パソコン等いろいろな工夫がみられた。

ウ 学習発表会

・保護者、ゲストティーチャーを招いての1年間の学習成果の発表も表現力や自信を高める場である。

その他「週番活動」「体育大会での応援合戦」「そにっこ祭り」等も子どもたちの自主的、創造的活動を育て表現力を高める場となっている。

基礎基本の定着と表現力を高めるための学年ごとの取組

低・中・高学年ごとの「話す・聞く」にかかわる目標を設定し、系統的な指導を積み重ねていくようにした。「はきはき話そう、しっかり聞こう」を全校のテーマとし、「話し方や聞き方のめあて」を教室に掲示して教室環境の整備に努め、スピーチ、ディベート、発表の仕方等各学年に応じた指導を行って「聞く・話す」のめあてに迫っていった。

ふるさと学習の充実

「ふるさと曾爾」には、豊かな自然、人情味あふれる地域の人々、奈良県無形民俗文化財に指定されている獅子舞などの伝統文化がある。総合的な学習の時間「かがやき」を中心に他の教科学習においても、郷土の「自然」「文化」「歴史」に課題を求め、体験学習や表現活動を多く取り入れていくようにした。特に、身近な「ふるさと」を学習素材とし、地域をはじめとする多くの人々にかかわっていただくことで、自ら課題を見つけ、自ら取り組んでいく力や豊かなコミュニケーション能力をしっかりと高めることができると考えた。

地域素材の教材化実践例

「ふるさとを紹介しよう ～6年生図工『わたしの町』～」

私たちの「ふるさと・曾爾」の自然、施設、文化財等を絵はがきやパンフレットにして「他の地域に住んでいる人たちに知らせよう」という学習活動に取り組んだ。豊かな自然、すばらしい施設や古くから伝えられている獅子舞などの文化財等を絵に描くことによって身の回りを見つめ直すことができた。そして、他の地域に紹介するということで、そのよさをしっかり考えることができたと思う。絵はがきやパンフレットにしたことで、「他に知らせる」という目的がはっきりし、「曾爾のよさ」「自然の美しさ」を分かりやすく知らせたいという気持ちを強くすることができた。



これは曾爾高原です。曾爾高原にはススキがいつぱいあって季節ごとに色が変わります。春は、黄緑色、夏は緑色で秋になると銀色になります。特に、夕日が当たって風になびくとそこは金色の海に変わります。そして、冬は雪が降って白い高原に変わります。三月に山焼きをするので黒くなります。

曾爾高原の紹介

指導と評価

相手意識や目的意識をしっかりとさせた表現活動の機会を多くとりいれ、小規模・少人数という特性を生かして、個に応じた指導と評価の充実を図った。

2 成果及び課題

子どもたちは、発表会などでは聞き手を意識した発表ができるようになってきたが、「自分の考えを自分の言葉で伝えること」即ち、自分の考えをまとめて分かりやすく話すことはまだ十分にできていない。子どもたちの多様な考えを認め合える学級集団づくりを基盤として「話すこと」に自信をもたせるように日頃の学習活動を工夫していかなければならない。

また、地域に学習素材を求めて取り組んだので、多くの人とコミュニケーションを図りながらふるさとのよさに気付くことができた。今後、地域との交流をさらに深め、地域の人々に学ぶことによってふるさとに対する愛着や誇りをより確かなものにし、子どもたちの心の内に曾爾で生まれ育ったことを誇りに思うアイデンティティーを育てていきたい。

3 その他参考となる事項

参考文献

・第50回奈良県へき地教育研究振興記念大会

北和・宇陀（曾爾）大会研究紀要（平成18年度）、研究実践資料

事例番号13 中学校 学級経営の部

学級担任のよろこびと興味・関心を持って楽しく校務を進めること

檀原市立八木中学校 教諭 松田 明彦

1 実践内容

私は、新任から26年間学級担任を持たせて頂いた。また、色々な校務に関わらせて頂いた。この間色々な思い出があり、簡単に語ることはできないが、あちこちで出会う教え子達が、「松太郎先生」と声をかけてくれることに大変なよろこびを感じる。学校・学年行事、学級活動においては、いつも楽しく真剣にクラス一丸となって取り組んだ。不登校傾向の生徒や非行に走る生徒、障害のある生徒、思春期にある様々な問題を抱える生徒などと一緒に取り組んできたことが、今ではとても懐かしく私にとっては宝物だと思える。



担任として、学級経営の柱にしてきたことは、いつも元気で笑顔でいること。
教室をいつも綺麗にしておくこと。 できるだけ最後に学級を出ること。で新任の頃先輩の先生方に教わったことを自分なりに解釈して実践してきた。は簡単そうでなかなか大変なことで、ついつい険しい顔つきになりがちである。しかし、どんな辛い時でも朝一番に笑顔で元気よく「おはよう！」と大きな声で教室に入っていくだけで、自分自身はもちろんみんなが今日も頑張ろうという気持ちになるものです。そして、教室中が笑顔でいっぱいになればとても幸せな雰囲気になります。は、担任自らが教室を片付けたり修理をしたりすることで、生徒に、「この担任は、自分たちの学級のことを考えてくれているんだ。」という気持ちが育ち学級意識が高まってくる。また、私は教室に鉢植えの植物を置くようにしている。朝、水をやったり肥料をやったりしているだけだが、何人かの生徒も進んで水をやってくれたり、家から花や鉢植えを持ってきてくれたりする。時には、「鉢植えの植物は、障害のある人に似ているね、自分では水を得ることはできないけれど周囲の人のちょっとしたかかわりで水を得ると、いきいきと成長し、美しい花を咲かせる。そして、私たちに幸せな気持ちをもたらしてくれるね。」と話します。教室に、ちょっと関心を持ってかかわりを持つことで日々の成長が見える物を置くことは、生徒に続けることの大切さや他への思いやりや優しさを自然に教えられるように思う。は、放課後の誰もいない教室に先生が残っている時間を作ると言うことです。終礼が終わってから、教室を片付けたり植物を見ていたりしていると、「先生…」と話しかけてくる生徒がいます。多くは、たわいもない話なのですが、聞いてやるだけで元気に帰っていきます。また、中には深刻な内容の時もありますが、うんうんとうなずきながら聞き、「それで、先生にどうして欲しい」とか、「またいつでも話してな」と言うだけです。生徒が、先生に話しかけると言うことは、なかなか大変なことで、まして悩み事や心配事となるとなかなか話づらいものである。忙しそうに走り回っているのは、生徒も話しかけにくいものである。これらのことは、昭和62年度第4回『私の学級づくり』実践記録に論文にまとめた。また、奈良県教育論文に、昭和62年度『生徒への意識付けと主体的な活動を促すための通信の役割』、平成4年度『田植え、稲刈り体験から学校週5日制を考察する』にまとめた。

ゆとりの教育、自ら学ぶ...など騒がれる中で自分だけのスタイルで何か新しい取り組みがしたいと考えて、自作教材理科ノートによる授業に取り組んだ。このことは、昭和61年度奈良市教育推進教育論文、『自作教材理科ノートを使つての授業』、平成元年度奈良県教育論文、『自作教材理科ノートによる理科教育の実践例自ら学ぶ生徒の育成をめざして』にまとめた。理科ノートは、教え子達に大変評判が良く、うれしいことに、今でも理科ノートを大切に持っていると言ってくれる生徒もいる。

私が、新任から大切に取り組んだことに、校外学習がある。その学年の3年間を見通して、各学級から校外学習実行委員を集め、企画・推進し、ただ行事として取り組むだけでなく、学年・学級の力を高めていくことを心掛けた。平成9年度奈良県教育論文に『生徒の自主的な活動の積み重ねによる修学旅行の取り組みについて』としてまとめた。教え子達が、「あの時の修学旅行は、今までで一番楽しかった...」などと言ってくると誠にうれしいものである。また、現行の教育課程実施にむけて、平成10年度から教育課程検討委員会で議論・検討を重ね、推進してきた。特記すべきは各教科の選択教科と、総合的な学習の時間のテキストを全職員で形のあるものにしたことである。共通理解と教材作りにずいぶん時間もかかったが、今振り返ると、みんなが自分の経験と持ち味を十分に生かすことができたと思う。平成4年から、学校週5日制が随時実施され、学校・家庭・地域の連携が叫ばれるようになり、土日の子どもの受け皿をどのようにしていくかで、色々なところで色々な取り組みが始まった。私は、「青少年のための科学の祭典」に参加したり科学技術振興事業サイエンスレンジャー（SR）として、地域の子供会や福祉施設へ出向き、科学実験や工作をしたりという活動をしてきた。平成16年度、奈良県教育論文で『青少年のための科学の祭典に参加して - 学校・家庭・地域の連携について - 』としてまとめた。今年も、奈良工業高等専門学校での「科学の祭典」に参加させてもらった。この取り組みは、常に生徒の視点を大切にしながら今後も続けていきたいと考えている。

2 成果及び課題

今年度は、以前から希望していた、障害児学級の担任として嬉々とした毎日を過ごしている。生徒一人一人の観察から始まり、その生徒にあったカリキュラム作りを考え、何をどのようにしていくか実践し検証して、次の取り組みを工夫していく。その時々臨機応変に対応していかななくてはならないし、教科書や手引き書など無いのである。もちろん、周りの生徒との関わり、家庭や地域との関わりなど本当に幅広いものがある。来年度から実施される、特別支援教育についても考察中である。ノーベル生理学・医学賞受賞者であるオーストリアのコンラート・ローレンツは、『生命は学習なり』で、「人間というものは第一に自分の好きな人、第二に尊敬を抱いている人からのみ伝統を受け継げるようにプログラミングされている。」と記している。好かれるとは、尊敬されるとはどういうことかは、人によって様々であろうが、この言葉からすれば、まずは、真剣に精一杯、生徒に接することが大切なことであると思う。今年度、また担任になれたことに感謝とよろこびを感じ、初心に戻ってこれまでの経験を大いに生かして楽しく実践していきたい。

3 その他参考となる事項

特になし

1 実践内容

地元3つの小学校卒業生の本校への進学率は現在も約75%である。長年にわたる地域の本校に対する負のイメージがまだ払拭しきれていないのも原因の一つであると思われる。また、基礎学力が充分備わっていない生徒が多く、授業中自分の存在をアピールできていない生徒の割合も少なくない。私の担当する数学の授業においても、「分からない」「興味が持てない」「発表ができない」等から集中ができていない生徒がいる。そこで、この克服に向けて北中学校数学科教員全員が協力して、学力向上＝「全員が分かる授業」の実現と学習習慣の定着について取り組んだ。



数学科における少人数授業の実施

数学の授業をすべて、1クラスを習熟度別に2つに分けて授業することから始めた。

6年の間、いろいろの変遷を経て現在の方法にたどりついた。

具体的な取り組みの概要

・学習集団の編成

ひとつの学級を基礎・基本コースと標準コースに分割する。生徒の希望を優先させながらも、基礎・基本コースの人数が半数を超えないように調整する。章ごとにコースを変えるので、新しい章に入る前に、復習テストを実施し、生徒がコースを選択する参考にする。

・担任教員

1年間を通して、それぞれのコースの担当を変えない。当然、自分の学級の生徒でありながら1年間数学を教えることができない生徒もでてくるが、1年間を通して同じコースを教え続けるほうが、コース毎の生徒の個に応じた指導がしやすい。全学年4クラスなので、1人の教員が4クラスとも基礎基本コースを担当するか、標準コースと基礎基本コース2クラスずつを担当するかは、学年に任せる。

・教員間の共通理解

1週間に1時間、数学部会を時間割に位置づける。生徒の様子交流、教材・教具の交流、指導内容、評価等について共通理解を深めることにしている。なお、授業の進度の調整連絡は学年ごとに頻繁に実施することにする。

・多様な教材・教具の開発

基礎・基本コースの授業については、既習内容の確認プリントや、ヒント・解説つきのプリント、基礎的な練習問題の繰り返しのプリント等、いろいろな工夫を凝らしたプリントを出来るだけ多く準備する。また、できるだけ具体的な教材教具を準備することを心がける。

標準コースは基礎・基本コースより、習熟の度合いの差がさらに激しいので、授業中に、多種類の練習問題を準備し、時間をもて余すようなことにならないように配慮する。

全学年において、計算問題ばかりのプリントを単元ごとに、また習熟度別に、A、B、C（単元によってはDも）コースに分け、さらにそのコースごとに授業の進度に応じて1級から10級までの10種類のプリントを準備し、いつでも授業や宿題に使用できるようにした。単元は次のように分類している。

小学校の復習、正の数負の数、文字と式（1年）、方程式（1年）、式の計算（2年）、方程式（2年）、平方根、式の計算（3年）、方程式（3年）、総まとめ

300種類を超えるプリントを、6人の数学担当教員が分担して、すべての問題と答えを Studyaid(ソフト)で作成した。印字したのもも保存してあるが、適宜編集できるようにパソコンにも保存している。

・評価

もちろん定期テストの問題は同一。評価方法、細かな評価基準の統一は毎年4月に確認しあう。

・生徒へのアンケート、生徒の感想収集

学習習慣の定着

- ・個に応じたいろいろな種類の課題を毎日提供することで、家庭学習の習慣をつけさせる。時には時間をかければ、必ずできる課題も与え、一人でできたという満足感が得られるような課題も準備する。また、標準コースでは、じっくり考えないと解決の糸口が見えてこない課題も与え何週間後に解答を与えるということもし、数学的な考え方を身につけさせ時間の提供の工夫をしている。
- ・計算力定着のために先ほど述べたプリントをフルに活用し、自由勉強、発展的な学習に利用するようにしている。
- ・人数は少ないが数学検定合格を目標に検定用の問題も与えながら、家庭学習の時間を増やす試みもしている。



2 成果と課題

習熟度別少人数授業は、予想以上に生徒や教員にとって魅力的なものとなっている。具体的に、生徒からの感想からは「質問がしやすい」「発表回数も増えた」「授業が楽しい」「集中もできる」「苦手な数学がおもしろくなってきた」というものが多かった。教員にとっても、「生徒が生き生きと粘り強く取り組むようになった」「生徒のつまづきや悩みに気付きやすくなった」「発問の工夫もできるようになった」「一人一人に行き届いた指導ができるようになった」とすばらしい成果が見られた。特に数学を苦手とする生徒の学習意欲や理解度の向上に貢献し、大きな成果がある。また、学習意欲の高まり、授業への集中、教職員の意識の向上など他教科への波及効果も大きく学校全体の盛り上がりにつながった。ただし今後もさらに指導法の工夫・研究を続け、教員の力量を高める必要がある。学習習慣の定着については、生徒の実態把握（家庭学習、1週間の生活の帯グラフの作成）と、より具体的に、わかりやすい、個に応じた家庭学習の課題の与え方を工夫していかなければならない。小学校との連携を密にしながら、長期的な見通しと他教科との連携も充分図り、学校全体としての取組を今後さらに模索していきたい。

事例番号15 中学校 生徒指導の部

「生徒理解を深めるための校内組織の整備と地域・関係機関との連携」について

平群町立平群中学校 教諭 倉内 清共

1 実践内容

平成14年度より生徒指導主事として、本年度で5年目を迎える。その間、様々な問題に直面した。その中でも平成14・15年度に大変大きな問題が発生した。その内容は、生徒指導主事である私自身の未熟さもあり、本校の生徒指導体制が一部の保護者に理解されず、他府県の外部団体が「校則」や「生徒への対応」に関して介入してきたのである。その対応におわれるなか、生徒は、徐々に「揺れ」から「荒れ」という状態に陥った。その様なきびしい状況の中、生徒指導部を中心として職員全体で生徒指導体制についての再検討を重ねた。



その結果、生徒一人ひとりの理解を深めることを原点とし、(1)「組織的な指導体制の整備」、(2)「地域・関係機関との有効な連携」、(3)「家庭訪問の充実」を基本的かつ重点的な視点とした。

(1) 組織的な指導体制の整備

複数の視点から生徒の変化に対応できるように、報告・連絡・相談・調整システムの徹底、生徒の生活実態をよりの確に把握するため養護教諭と連携し指導にあたることや、スクールカウンセラーによる相談活動の周知と利用の啓発を行った。

生徒指導部会の充実（最低週1回の開催）

メンバー：生徒指導主事、各学年生徒指導係（原則男女各1名）、養護教諭、（人推教員）、関係職員

内 容：各学年・養護教諭との情報交換（不登校生を含む）

問題行動等への指導・援助の模索

西和広域・生駒市生指部会、青少年補導委員会などの情報確認と参考事例などの紹介

教育相談部の設置

スクールカウンセラーが本校に設置されて5年になる。1年目は、学校側の経験の浅さからうまく機能させることができなかつた。翌年、その反省から、生徒指導部の中に教育相談部を設置し、生徒、保護者の悩みを積極的に受け止めることができるような体制整備にあたった。

メンバー：生徒指導主事、養護教諭、スクールカウンセラー、教育相談係（各学年1名）

内 容：相談内容（生徒・保護者の悩み）について援助方法の模索

スクールカウンセラーからの指導助言、参考事例の紹介等

(2) 地域・関係機関との有効な連携

生徒一人ひとりの課題に応じた指導は、学校だけでその解決や防止に取り組むことがたいへん難しい状況になってきている。そこで、地域や関係機関との連携を図

りながら対応を進めることがより効果的であった。具体的には、教育研究所生徒指導係（指導主事）、町教育委員会、警察（本校の場合は、町内駐在所との連携が大変有効であった）、子ども家庭相談センター、家裁調査官、町青少年補導委員会、西和広域生徒指導連絡協議会、生駒市生徒指導部会（隣接町として参加）等である。現在では、毎日の挨拶運動に民生委員の方が2ヶ月に一度、参加され共に活動している。



朝の挨拶運動

(3) 家庭訪問の充実

保護者との効果的な連携を進めるには、日頃より、様々な活動を通して信頼関係を深めることが必要である。問題が生じた時だけ協力を求めようとしてもなかなかうまくいかない。その為、日頃から家庭訪問を通して、保護者と意思疎通を図り相互理解を深める機会を多く持つことが大切であると考えた。そして、次の内容を確認した。

保護者の心情を共感的に受け止める。何よりも大切なことは、保護者の訴えに耳を傾け、「聴く」こと、そして「認め」「励まし」「応援する」

具体的な支援を行う。抽象的な専門用語を並べるのではなく、「今、何をすべきか」を助言し、「今何ができるか一緒に考えましょう」という姿勢で臨む。

組織として対応する。担任等が一人に対応すると、保護者が過度に依存してくることがあるので、保護者との連携は組織で対応（チームサポート）することが必要である。

個人情報保護につとめる。

「30分の電話より5分の家庭訪問」

2 成果及び課題

組織的な指導体制の整備と積極的な関係機関との連携を行った結果、担任や一部の教師の抱え込みによる負担が軽減された。生徒の荒れとともに教職員が精神的に落ち込み休職に至るケースを耳にすることがあるが、本校の場合はその様な状態に至ることはなかった。また、家庭訪問の充実を図った結果、保護者との信頼関係が構築され、トラブルが減少した。

今後の課題としては、厳しい状況の中、職員全体で生徒指導体制について検討を重ねたことを忘れることなく、校内における研修の整備とその実施を通して、教員一人ひとりの実践的指導力の向上と学校組織としての一層の指導力の向上を図っていくことが不可欠となっている。また、特別支援教育との関わりも重要であると考えます。

問題行動の低年齢化が叫ばれている昨今、小学校との連携協力を今以上に密にすることも必要である。

最後に、多岐にわたりアドバイスをいただき、支えていただいた教育研究所、町教育委員会、西和広域、生駒市生徒指導部会の先生方には改めて感謝申し上げます。

3 その他参考となる事項

特になし

1 実践内容

生徒の問題行動が顕在化する背景として、将来に対する見通しがもてずに、不安のみが先行し、心の中で葛藤が反芻していることが推察できる。そもそも生き方の選択肢は多様であるにも関わらず、生徒自らが、己の夢や希望を抱くに至らないのはなぜなのだろうか。このことは、私が初めて教壇に立ってから今日まで、継続して追究してきた課題である。



その解決に向けた具体的な手立てとして、主に以下の4点について取組を進めてきた。

- (1)社会的発達を促す道德教育
- (2)生徒理解に根ざした進路指導
- (3)家庭訪問による保護者との協働的關係の構築
- (4)基礎学力の定着をめざした教育課程の再編成

まず、(1)の道德教育については、社会性の発達を促す視点に立ち、自尊感情を高め、他者理解を促す資料を開発するとともに、体験活動や研究授業にも取り組んだ。中でも「思いやり(共感性)」に着目し、相手の立場に身を置き、自らの意思で判断をくだす授業プログラム開発に着手した。その際、構成的グループ・エンカウンターやロールプレイの手法を取り入れることにより、体験活動にもとづ

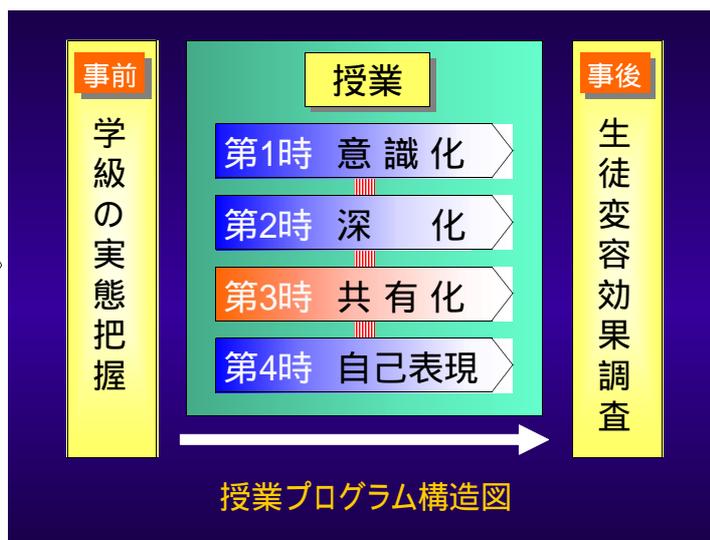


Fig.1 授業構成

く感情のゆれを生徒自らが体感し、より高次の発達段階へと導くことができた。

次に、(2)の進路指導については、指導者と生徒との「関係性」に着目し、将来を見据えた取組として何が必要であるのか、先行研究に基づき考察を進めた。その結果、「関係性」の構築において重要な観点として、相互間における心理的な距離を縮めることにあることがわかった。そこで、教育相談の有効性に着目し、定期及びおよび随時に実施する取組を立ち上げた。進路指導の領域から、定期の教育相談を、「進路ウィーク」として位置づけた。限られた時間での面談であり制約があるものの、生徒と指導者との相互理解が深まり、新たな信頼関係を構築する取組として定着しようとしている。

また、学校に対して批判的な保護者への対応については、(3)の保護者との協働の関係の構築が有効であると考えた。そこで、「生徒に寄り添い」・「保護者とともに」の基本姿勢をもとに、家庭訪問を核に据え、意見交換を積み重ねることにより、相互理解を深める取組を進めた。同時に、課題を抱える生徒に対しては、担任の指導力に限定せず、SST（チームサポート）体制により、関わりのある指導者全員の指導力を結集して対応できたことが、心の支えとなったことが思い出される。



Fig.2 SST 会議の構成

最後に、生徒への効果的な介入方法として、学力保障があげられる。日々の授業において、生徒一人一人を活かす取組として、発言機会の確保を心がけてきた。また、教育課程の編成では、新たに「基礎学習」の時間を創設することにより、生徒一人一人の学力に応じて、漢字・計算・英単語の定着に向けた取組を開始することができた。一方、指導目標として、挨拶が飛び交う学校、部活動の活性化、家庭訪問による生徒・保護者理解の推進を掲げる中で、生徒一人一人が「生きる力」を培うことができる教育環境を創造すべく、教育課程等の再構築に向けた作業を進めているところである。

2 成果及び課題

前任校では、体験活動を通じた感性を育む道徳教育への取組から、「生徒に寄り添い」歩むことの大切さを学ぶことができた。また、現任校では、課題を抱える生徒への関わりの中で、SST（チームサポート）の重要性を再認識することができた。微力な私を、まわりの指導者の様々な介入により支えていただき、生徒が変容する姿を目のあたりにしたとき、担任は司令塔の役割を果たさなければならないことを痛感した。生徒の実態を踏まえ、教育相談をはじめ教育課程の再編成を進める中で、様々な教育資源を再吟味し、「協働」の視点からの再統合を図ることが急務の課題となっている。今後は、生徒に「生きる力」を育むうえで、より効果的なSSTのあり方を模索するとともに、本校独自の教育デザインの構築に向けた取組が必要であると考えます。

3 参考文献

- 池島徳大 1995 「いじめ克服」にかかわる道徳授業研究 道徳教育方法研究, 1, 35-45
 八並光俊 2001 生き方教育としての進路指導をどう構築するのか 広島市教育委員会主催 全市中学校生徒指導主事部会講演資料
 ダリル・ヤギ、上林靖子監修 1998 スクールカウンセリング入門 勁草書房
 大野精一 2000 学校教育相談理論化の試み ほんの森出版
 外林大作・千葉ロール・プレイング研究会 1981 教育現場におけるロール・プレイングの手引き 誠信書房

心の健康を願って

大和郡山市立郡山東中学校 養護教諭 西村 敬子

1 実践内容

<はじめに>

近年子どもたちの心身の健康実態をみると、やはり憂慮されるところが多々あります。体力、運動能力においては、10年前と比べて特に筋力・持久力・柔軟性などの低下は顕著です。視力低下やう歯、アレルギー疾患も増えています。不登校やいじめ、問題行動を起こす生徒も増え、いまや学校だけでなく大きな社会問題になっています。



さて、保健室には、日常子どもたちが「しんどい」「お腹が痛い」「頭が痛い」など、さまざまな身体的な不調を訴えて来室してきます。その訴えの背景には精神的な問題が多々あります。学習のつまずきや、進路の悩み、いじめ、友だち関係のトラブル、異性の悩み、身体の悩み、家庭的な悩みなど様々な要因が見受けられます。子どもたちは、これらの精神的な問題をうまく対処できればよいのですが、時には、難題であったり、解決するまでに時間がかかったりして、そのしんどさを身体で表現します。身体症状からでる心のSOSを早くチャッチし、その生徒の問題解決を早期に図るため、健康相談活動しながら子ども自らが自分の課題に気づき、解決していく力をつけるように支援していくことが大事であると考えます。

心の健康教育への取り組みは、平成14年1月から「保健室登校」をしたA君の取り組みがきっかけとなりました。A君は友達とのトラブルから1年生の10月～12月の終業式まで、長期にわたり学校を欠席をしました。A君の心の支援に合わせて、全校生徒にも心をいきいき元気にさせたいという願いを込めて、心の健康をテーマにした保健だより「ハートでキャッチ、いきいきライフ」をシリーズで11回発行しました。

<～ A君への取り組み～>

A君には、保護者、教職員の共通理解のもとに健康相談活動を繰り返し行い、心のケアを常にしながら、心理テストも活用して心の状態を知る手がかりにしました。日常的には、心の状態を観察するために、登校時と下校時に1～10の数字で表し、どんな時に心が高揚するのか、また、どんな時に心が沈むのか、心の変化を自ら洞察させることもしました。週目標や一日の小さな目標を設定させ、やり通す達成感で少しずつ自信を回復させていきました。生活リズムの立て直しは、ヘルスライフカードを作成し、規則正しい生活が出来るように心がけさせました。また、交換日記はA君、担任、養護教諭との間で行い、A君の気持ちが少しずつ出せるようにし、担任と養護教諭は、この日記を

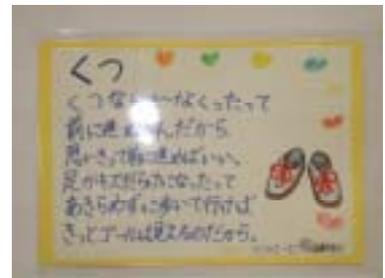
通して励ましのメッセージを書き続けました。また、毎日の健康相談記録をつけ、明日への一步につなげるようにしました。

半年間の取り組みの結果、二年生の6月には終日教室に復帰するまでになりました。以後は適宜、心のケアを心がけました。右のバームは、教室復帰5ヶ月後の絵です。自信が出てきて友だちとの交流の広がりを示しています。三年生では学級委員をし、クラスのリーダーとして活躍しました。今も、不登校生や保健室登校生の心の状態に合わせて、支援計画を立て、教職員共通理解のもとに、保護者、担任、関係教員、スクールカウンセラー等と連携を図りながら支援をしています。



平成14年9月、全校生徒対象に心と体の健康調査を行いました。その結果から、特に「気が沈んだり、心が重くなったりすることがありますか。」という質問に対して、「よくある・ときどきある」と答えた生徒は全体の62%と高率でした。また、「ストレスを感じた時、解消する方法がありますか。」という質問では、「ない・わからない」と答えた生徒は46%で半数近くいました。保健室に来る心身の不調者やアンケートの実態から、もっと予防的な心の健康教育が必要だと思い、教職員に理解を得て、平成15年から保健の授業で、「心の健康」の単元を養護教諭として行いました。特にストレス対処法について、ストレスを抱えた時、自分にあった解消法をすること、また、どうしても解決に至らない場合は、親や先生に相談することを強調して学習活動を進めました。

更には、少年写真新聞社発行の北原りゅうじ先生の著作「マージナルマン」をプレゼンテーションの形に変えて、総合的な学習の時間に全校生を対象に授業をしました。「マージナルマン」は思春期の壁を乗り越えることによって、将来の自己実現が叶えられるようになることを生徒向けに、漫画で分かりやすく説明した話です。更に生徒保健委員会活動を通じ全校生徒に心のメッセージを募集し、寄せられた作品を校舎に展示し、保健便りでも紹介しました。



2 成果と課題

「心の健康教育」に取り組んで、生徒の身体症状をみるだけではなく、抱えている心の問題を支援して、それがうまく解決した時は養護教諭として、その生徒の笑顔が何よりも嬉しいものです。思春期はストレスも受けやすいですが、それを適切に対処する力を身に付け、夢や目標をしっかり持ち、「明るく、元気に、笑顔で」人生がおくれるように「心の健康教育」に取り組んでいきたいと考えています。特に本校の子どもたちは、心の問題を多く抱えているので、こうした取り組みは大いに役立っているものと考えます。

今後の課題として、家庭環境や子どもの実態を一層見極め、教職員や保護者、関連機関連携のもとに、子どもを常に見守り、愛情を持って広く子どもに接しつつ、心が豊かに育つ心身の健康教育の実践を目指したいと思います。

3 その他参考になる事項：K-higashi@delexe.ocn.ne.jp（郡山東中学校）



1 実践内容

- (1) 「自主性」発達段階を以下のような3段階に設定してみる。

好きになること

自分で近い目標を設定できること

自分のことを客観的に見て、今すべきことを判断できること

- (2) < の段階について >

本校の校区では、社会体育として活動するソフトテニスのジュニアチームがあり、中学校の入部段階で数年の経験を積んでいる生徒が数名入部してくる。

入部時にソフトテニスが初心者であっても、身近に高い技術を持った選手がいるため上達が早い。半年ほどたつと選手たちは昼休みにテニスコートでソフトテニスをして遊べるようになる。学校のルールを守っている限り、部活動の時間以外でもソフトテニスというスポーツに親しめる機会を大切にする。

遊びの中では、先輩後輩のぎくしゃくしたトラブルは起きにくい。この段階で、挨拶や返事という基本的なコミュニケーションがとれることを身につけさせる。

< の段階について >

ゲームができるようになると、勝敗というはっきりした結果が伴うようになる。

12歳くらいの年齢では「勝敗」という結果を突きつけられることには極度の緊張感が伴う。また、テニスというスポーツでは、自分一人の力で相手コートにボールを返球しなければならないため、個人にかかる精神的重圧は大きいものがある。

その段階を乗り越えさせるために必要なことは、技術的な裏付けだけである。したがって、「優勝を目指す」や「1回戦突破」などの結果を期待するような目標ではなく、今具体的に自分に必要な技術を繰り返し練習する必要性を感じさせ、自分には何の練習が必要かについて自分で考えさせる。

あとは、指導者が的確にチェックとアドバイスをすることが大切である。

< の段階について >

技術的な裏付けができ、ゲーム経験が増えてくると、ゲーム中の次の瞬間に何が起るかを予測しようとするようになってくる。この能力を2つの方向に活用できるように意識させる。

1つは、短い時間内で予測して、瞬間的に次の行動を判断する力。もう1つは、長い時間で集団の中での自分の役立ち方を考える力。2つの力を生活全般の中で積極的に練習しようとするのが「自主性」の育成につながっていく。

2 成果および課題

(1) 成果

選手がレギュラーか否かにかかわらず、自分に適した目標設定ができるようになり、人との比較ではなく、自分の目標と向き合うようになった。そのため、自分以外の部員のゲーム結果を勝ち負けだけで判断しなくなり、応援も真剣にできるようになった。

トップレベルの選手は、高校生との練習や県外の中学生と練習試合をすることにより、より高い競技レベルに出会わせてやることで、自分の目標設定がどんどん高くなっていく。

平成16年度は、県でベスト4であったが、平成17年度近畿中学総体、全国中学校体育大会共に団体優勝を果たした。結果はいつもついてくるものではないが、選手自らの成長の延長線上に得た大会結果として評価している。

チーム全体の目標が高くなると、次のチームを支える選手たちの目標も高くなる。平成18年度の男子チームは、秋の新人大会では奈良県ベスト8であったが、夏の県中学総体では2位、近畿中学総体でも2位となり、2年連続団体で全国中学校体育大会への出場を果たした。あわせて女子チームも近畿中学総体に初めて団体で出場した。



(2) 課題

活動の幅が増えるに伴い、選手保護者の金銭的・時間的負担が増えた。活動をする以上、必要最小限の経済的負担は避けられないものであるが、学校活動全般にそうであるように、選手(生徒)とのコミュニケーションと同様に保護者とのコミュニケーションを大切にし、理解と協力を得られる体制を作るさらなる工夫が必要である。

学校部活動においては、強い意志を持っている生徒がそろう前提はない。日々成長を求めていくためには、指導者(教職員)と選手(生徒)の間で技術指導面と生活指導面での信頼関係が必要であり、その上で生徒たちに客観的な評価を常に伝えてやることは欠かせないことである。決して画一的な指導でだれもが成果を出せるものではないと感じる。

そのためには、教職員自身が常に目標設定や判断力の養成に努力することが必要である。そのことを教職員どうしの中で抵抗感なく伝え合い、向上心ををもって働ける職場環境を作っていくことが自分自身の今後の課題である。

3 その他参考となる事項

活力ある学校づくりを目指して、部活動だけではなく学校活動全般を「都南中学校ホームページ」にて積極的に配信しています。是非ご覧ください。

1 実践内容

(1) はじめに

平成17年8月22日、岐阜市長良川競技場で開催された全国中学校陸上競技大会において、3年生保平加奈絵が全国優勝を成し遂げた。全中は中学校で部活動をする者、指導する者誰もめざす最高の大会である。この最高の場で「日本一」に輝けたのは、彼女自身のひたむきな努力があったことはもちろんのこと、彼女を支えた部の仲間がいたこと、そして、専門的な技術のアドバイスなどで私たちを支えてくださった、多くの方々のおかげであると感謝に絶えない。



さて、私たちも中・高・大と陸上競技に親しんできたが、競技成績は決して誇れるものではない。しかしながら続けてこれたのは、よき師と出会い、厳しくも温かな指導を授かってきたことと、何よりも走ることが好きで、毎日違った風を感じながら走れることに、喜びを感じていたからである。トラック競技しか経験してこなかった私たちは、走・跳・投、そして種目により異なった練習メニューや専門的な知識が必要なこの競技に、未だ悩みながらも、ますます魅力にとりつかれているしだいである。

(2) 部の経営方針

本校は創立59年を迎える県下でも有数の大規模校であり、陸上競技部も歴史のある学校である。ここ20年、部の経営方針を 仲間づくり 体力づくり 記録の更新の順に置き、「楽しく、規律があり、自己実現のできる部活動」を目標に、仲良く和気藹々と活動してきた。部員数は40名を越え、キャプテンとパートリーダーの指示のもと練習が始まる。顧問同士はできる限り意志疎通を図り、競技者として生徒をどう育てていくか、練習内容やことばかけに至るまで気楽に話し合い、同じ方向を見て指導できるよう心がけてきた。生徒には競技者としてさらに伸びていく自信を感じさせ、高校へと引き継ぐことが私たちの役割だと確信している。

(3) 大会実績

1年	ジュニア・オリンピック	Dクラス砲丸投		2位	12m24cm
2年	全国中学校陸上競技大会	砲丸投	予選1組	16位	12m44cm
	ジュニア・オリンピック	Cクラス砲丸投		3位	12m87cm
			(年間最高記録)		13m34cm)
3年	全国中学校陸上競技大会	砲丸投		1位	14m88cm
	ジュニア・オリンピック	A、Bクラス円盤投		1位	35m53cm

(4) 成長の足跡

173cm、58kgの素晴らしい体格の彼女は「足が速くなりたいから。」と、陸上部に入部してきた。小学校では走ることが得意だった彼女(50m走7,6秒)だが、県下ですぐに通用するものではない。1学期は基礎体力づくりの毎日である。5月のある日、

ドッジボールを投げる肩の強さに投擲競技で成功する可能性を感じ、砲丸投げを勧めてみた。ソフトボールを投げさせると1年生にして49mに私たちはときめくものを感じた。だが本人はあまり乗り気でない。しかし、この頃から計画的にメディシンボールや砲丸を使っただけのトレーニングを組み込むことで、彼女は「鉄の玉」にも次第に慣れていった。学校には砲丸サークルがなく、土の上で投げていたが、「環境が人をつくる。まずは自分たちから本気になる。」と、夏休みに自力でサークルを作り上げた。「全中に行こう！」を合い言葉に、真新しいサークルで突き出し・ステップと、補強・ダッシュの初歩的な練習が始まった。ひと冬を越し、2年生で期待どおり全中標準記録12m30を突破。念願の群馬大会出場を果たした。しかし、緊張のあまり動きが硬く、実力を出せないままあっけなく予選敗退であった。その後、新たな目標に向かって奮起を期待したが、練習への積極性に欠け、精神的にもまだまだ弱く、練習から逃げているかのような日々であった。相変わらず練習に没頭できないまま、この年のジュニア・オリンピックでは3位に落ちた。その直後「はじめて悔しいと思った。本気で勝ちたい。」と彼女が口にした。この日から私たち顧問の「挑戦」も始まった。朝練習、合同練習の依頼、練習メニューの作成。練習に集中できるよう学校生活での精神的なサポートなど、気合いの入った毎日となった。中西、中上先生には市内の中学校合同練習で専門的な技術指導をしていただき、瀧谷先生には技術指導と高校生との練習の場を提供していただいた。2年生の3学期には、私たちの期待どおり彼女の気迫も日に日に増していった。



(5) 栄冠を手に

万全を期して前々日岐阜に入った。心身のコンディショニングに重点を置き、緊張しないで試合に臨めるよう心がけた。幸いにも岐阜に入ってから調子が向上し、練習でも自己ベスト更新の連発である。改めて彼女の集中力の凄さに感心した。午前の予選を2位で通過し、決勝では12人中、最高記録(14m43cm)でベスト8へと進んだ。抜きつ抜かれつの大接戦の末、最終投擲者の彼女は土壇場の6投目、見ている者も震える中、大幅な自己ベストで大逆転を果たした。白旗が揚がると一気に鳥肌が立ち、安堵と喜びの涙が溢れてきた。私たちはあの放物線の軌跡を、生涯忘れることはないだろう。



2 成果及び課題

彼女の「優勝」により部内に、本気になれば目標は叶えられるという引き締まったムードが流れるようになった。活動の中で人間的な成長を目指し、「重ねた努力は、決して自分を裏切らない」と教えてきたが、良きお手本となってくれた。私たちも生徒の要求に応えられるよう、常に視野を広げ、自分たちが経験してきた種目以外の実際の動きや、指導方法を意欲的に学んでいきたい。また、どんなに忙しくても一日1回はグラウンドに顔を出し、生徒と共に過ごす時間を最優先していきたい。

3 その他参考となる事項

特になし

1 実践内容

香芝中学校は、「和敬信愛」の校訓のもと、生徒たちが勉強や運動、そして文化活動に積極的に励んでおり、特に部活動に関しては、伝統的に活発である。私は本校に赴任当初から、剣道部の活動に携わり、平成4年には武道場が完成し、恵まれた環境のもと練習できるようになった。



剣道は「剣の理法に基づく人間形成の道である」と示されるように、単に勝ち負けを競うものではなく、剣道を通して人間性を磨いていくことを常に考え、生徒の指導にも反映させてきたつもりである。また、入部してくる生徒たちは、今でこそ経験者が多くなったが、小学生時代はそれほど実績を残した者はおらず、女子にいたっては初心者が殆どである。ただ、生徒たちの強くなりたいという熱意と一生懸命に取り組む姿勢は、県内のどこの学校にも負けないという自負がある。このようなすばらしい環境と生徒たちに囲まれて、次のような指導方針のもと活動をしてきた。

(1) 剣道は伝統文化

剣道は、「稽古」つまり古（いにしえ）を稽えんと言うように、先人が残してきた多くの教えがあり、日本古来の伝統文化である。剣道の目的である人間形成を目指して、剣道の理念をわかりやすく生徒たちに伝えていくことが、我々指導者の役割である。また、その目的を達成する一つ的手段として身近な目標を設定する。つまり、全国大会出場を目指して努力することである。

(2) 「剣道即生活」「生活即剣道」

剣道をすることが日常生活に生かされなければならない。学校生活や家庭生活をきちんとすることで剣道が出来るということを指導している。特に、剣道は対人競技であること、つまり、竹刀を通して相手の心を読み、感じる競技である。生徒たちには、相手の心を考え、知ることの大切さを学び、それは日常生活でも同じであることを伝えている。

(3) 生涯剣道

剣道は、歳をとっても出来る数少ない武道であることから、部訓でもある「威風堂々」の言葉通り、将来につながるような真っ直ぐで正しい剣道をするを心がけている。生徒たちは皆、香芝中学校の剣道に誇りを持って稽古に励んでいる。



稽古風景

(4) 地域・保護者との連携

土日はもちろんのこと、平日においても保護者が来校し、練習をいつでも見学できる雰囲気と体制をとっており、剣道の事だけでなく、生活全般についても相談を受け、保護者と指導者が連絡を密にしながら一緒に生徒たちを育てていこうという意識を大切にしている。また、地域の小学生が中学校の稽古に参加したり、私自身も含め中学生が各道場へ稽古に行き、地域との交流や連携を図っている。

2 成果及び課題

- 全国中学校剣道大会 男子団体 5 回出場
個人 5 回出場
女子団体 8 回出場
(ベスト16 2 回)
個人 4 回出場
- 近畿中学校総合体育大会 男子団体 6 回出場
(準優勝 2 回)
女子団体11回出場
(三位 4 回)
- 県大会(新人大会・春季大会・総体)
男子団体優勝15回
個人優勝 5 回
女子団体優勝15回
個人優勝 8 回



平成18年度近畿大会準優勝

卒業生が高校や大学で活躍をしてくれることは、中学校の指導者として大きな喜びである。今年も高校の全国大会に9名、近畿大会に十数名の卒業生が出場を果たした。

私自身、昨年度まで生徒指導主事、今年度より教務主任として校内での重責の中、与えられた職務を全力でまっとうするとともに、他の職員とも連携を図りながら、これまで指導してきた事を学校生活全般に渡って生かしていくとともに、今後も謙虚な気持ちを忘れず、生徒たちとともに努力していきたいと思う。そして、将来、香芝中学校で剣道を学んだ子どもたちが、生涯、剣道を続けることが出来る環境を築きたいと考えている。

3 その他参考となる事項

香芝中学校ホ - ムペ - ジアドレス <http://www8.ocn.ne.jp/~kachu>

部活動を通して豊かな心をもった生徒の育成
～ハンドボールへの思い～

生駒市立上中学校 教諭 吉迫 隆志

1 実践内容

「やればできる」この思いを胸に大学を卒業し、晴れての夢そして目標であった奈良での教員生活が始まりました。1年目から幸いにして、ハンドボールの指導ができる中学校に勤務することができました。ここでの3年間の経験が、教師そして指導者として、私にとって大変意義深く、貴重なものとなりました。大学を卒業したばかりの私は、とにかく技術・戦術、自分の経験だけを強引に教え込むことで、良い選手、強いチームが作れるというような指導になっていました。生徒とはすれ違いや、気持ちの伝わらない悪循環の繰り返しで、一向に成果は上がらず、いきなり大きな壁にぶつかりました。もやもやしていたある日、所属した学年主任の先生から「監督」としてでなく「教師」として信頼されることがチームをまとめ、強くしていく第一歩である。『学級担任が一人前にできてこそ、「監督」としても認められるんだ』の一言。まさに「目からウロコ」でした。その後、教員採用試験に合格し、現在勤務している上中学校ハンドボール部の指導者としてスタートをきることになりましたが、前任の諸先生方の功績が大きいこともあり、プレッシャーに押しつぶされそうな日々の連続でした。そんな時、常にその先生からの言葉を胸に、私も一人前とはいきませんが、クラス運営に関しても部活動と同じように、情熱をもち、取り組むことを心掛けてきました。それと同時に、「焦っても仕方ない」「基本にかえれ」と言いかせるかのように練習の内容を一新しました。11月の新人戦で県大会1回戦敗退のチームが7月の県大会では優勝し、近畿大会で1勝するまでになりました。それからの私は、良い選手、強いチームを作る第一歩は、基礎体力の向上であるといった信念を持つようになりました。「花の咲かない寒い日は、下へ下へと根をはやせ、やがて来る春に大輪の花を咲かせるために」の言葉のように。その後、当たり前であるかもしれませんが、以下にあげるいくつかの取組みを継続しています。



- (1) 生活指導が大切 学校生活の全てに対して、模範的な生徒であれ。挨拶、言葉遣いなどの様々なことに対して気配りのできる人間になれ。厳しいけれど人間性を身につける指導を徹底した。また個人的なことで気になる時は、必ず本人と会話することを欠かさないようした。
- (2) 個人ノート(生徒とのコンタクトをとること) 技術面やメンタル面、食事内容等を含め、日々の活動を全員がノートに書く。その事に対して、私の考えをコメントしました。キャプテンに対しては個人的なことだけでなく必ずチーム全体に関する事を書きました。言葉で言えないことを個人の考える材料として書き続けました。そして、このノートが生徒と私をつなぐパイプであるということを理解し、このノートに毎日の自分の練習成果と反省が書き込まれていきました。

(3) 身体の自己管理 トレーニングの効果を上げるために栄養面にも目を向け、家庭にも協力して頂き、食事や普段の生活の中で自己の身体を管理する能力を高める指導も試んでいます。

(4) 常に謙虚であれ 生徒は試合などで良い結果や成績を残すと、ついつい、いろんな面でルーズになりがちであり、私も含め選手個々、そしてチーム全体を戒めるうえでも「謙虚な心」を忘れることのないよう厳しく指導しています。お世話になった方々には「ありがとうございました」と素直に言える感謝の気持ちを忘れない心をもつこと。「おかげさまで」という謙虚な心を持ち続けることを日々反復して話しています。これらの取組みを継続することで県内では常に上位に入る実力になり近畿から全国へと目標はステップアップしていきました。

2 成果及び課題

女子部は現在県総体7連覇中であり、平成16年近畿の壁を破り、悲願であった全国大会出場を果たすが初戦敗退、1勝のおもみを痛感させられました。その教訓を生かし、翌年近畿初優勝での連続全国大会出場、選手は大会毎に成長し、ファイナルまで駒を進めるが、夢はかなわず『準優勝』。夏の雪辱を果たすべく望んだ12月のJOCジュニアオリンピック



2005年全国中学校体育大会(愛知県豊橋市)
第34回全国ハンドボール大会 準優勝

カップにおいて、またもや『準優勝』で終わってしまった。そして今年より開催された春の全国選抜大会、夏の全国大会と大きなプレッシャーをはねのけ3年連続全国大会出場。あと一步まで迫った「こだわった全国優勝」この目標を持ち続けることで選手との信頼関係、人間関係を一番大切な宝物としてのチームづくりをしてきました。私自身、まだまだ未熟であり「選手の力を最大限に生かしているのか」と自問自答をくり返すなかで「監督として選手に接する時には迷いを捨て、自分の信念をもって指導にあたる」そして、誉める時も叱る時も常に、「君たちが大好きで大切な人なんだ」と愛情をもって選手を伸ばすことを念頭に置いた指導を心掛けています。そして、試合で勝った時には選手の頑張りを誉め、負けたときには自らが責任をもち、反省をくり返すことで指導者も成長していくものだと考えています。

全国優勝にこだわって・・・富士山の頂上にたった者だけが見える景色がある。写真で見ればどんな景色かわかるだろう。しかし、自分で登りきった時見えたものは景色だけではないはず。とてつもなく寒いのかもしれない、吹雪で前が見えないのかもしれない。これが、言葉では言えない感動や喜びであり、その時その頂上にたった者だけが見える「本当の景色」だと私は思っています。苦しいとき、困ったときこそがんばることのできる生徒を育てていかなければ、そこにたつことはできないと思う。

「妥協」せず、そして、「常に謙虚であれ」このような気持ちをもち活動することが、学校や地域、保護者の理解を得て長く愛される部活動につながると確信しています。

3 その他参考となる事項

生駒市立上中学校ホームページ <http://www.ed.city.ikoma.nara.jp/school/kami-j/>

事例番号22 中学校 へき地教育の部
十津川の自然を活かした理科部会の活動
十津川村へき地教育研究会 理科部会

部長	十津川村立西川中学校	教諭	高井 成泰
部員	十津川村立上野地中学校	教諭	玉置 久稔
	十津川村立折立中学校	教諭	上谷 弘文
	十津川村立上野地小学校	講師	中砂 保夫
	十津川村立折立中学校	講師	鎌倉 一

1 実践内容

理科部会はへき地教育研究会の専門部の一つである。村内の小中学校の理科に興味のある教師が集まり、「地域素材を教材化し、実験・観察・調査等で学校間の交流を深める」というテーマでいろいろな取り組みを行っている。十津川の自然を授業に活かす工夫と研究を深める中で、子どもたちに十津川の自然のすばらしさを伝えていきたいと考えている。十津川ではまだまだ豊かな自然が残っている。晴れた日の夜空には天の川が横たわっており、四季折々の草花を楽しむことができ、また珍しい動物とも出会うことができる。

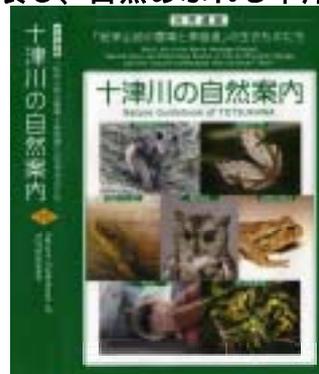


このように生きた教材が身の回りにあふれた十津川の自然を活かし、子どもたちの理科や科学に対する興味と関心を深めさせるような授業の在り方を考え、交流する場として理科部会がある。十津川村内には小学校6校、中学校4校が4つの地域に分散している。中学校では各学年1クラスの小規模校であるため、理科の教員が1名しかおらず、校内での教科研修や教材・授業研究が難しい状況であり、理科部会がたいへん貴重な交流の場となっている。

具体的な活動としては、公開授業(授業研究)の実施・交流、中学校から小学校へのゲストティーチャーとしての授業への参加(水生昆虫の観察や昆虫採集、実験等へのアドバイス等)、フィールドワーク等による研修(岩石や鉱物、他地域での化石採集、玉置山頂上での天体観測会、両生類からほ乳類までの解剖や標本作りなどの研修を実施)、十津川の自然ガイドブック「十津川の自然案内」(動植物図鑑)の作製などが中心である。一昨年度は全国川サミットにも参加した。十津川のダムの上流における魚類相の調査を行い、魚類相の変化やダムが自然に与える影響などをサミットにて報告した。

また昨年度は、県へき地教育研究大会で理科部会の活動を発表し、自然あふれる十津川での理科教育について見直す機会となった。

そういった中で今、理科部会で最も力を入れている取り組みが自然ガイドブックの作製である。十津川で観察される動植物を写真と文で紹介した図鑑であり、十津川の自然のすばらしさを子どもたちに伝え、子どもたちの知的好奇心に応えられるものにしたいという思いで作っている。十数年前から構想があったが、方法や知識、時間等の諸問題で進んでいなかった。平成15年度から本格的に始動、十津川高等学校の浅見卓先生の指導の下、ノウハウを得ながらようやく完成にこぎ着けた。写真やイラスト、文章等すべて



自分たちでコツコツと作り上げたもので、480ページにおよぶハンディータイプの図鑑となった。このような本格的な図鑑を、私たちの手で作り上げることができるとは全く夢のような話である。十津川村教育委員会の力添えにより、十津川村内全戸に図鑑を配布をしていただけることも心から感謝している。この図鑑によって、十津川村民の方々をはじめ、多くの方に十津川の自然のすばらしさに触れていただく機会ができ、また子どもたちや村民の方々が生物を調べたり、身近なものにしていただく手助けになればと切に願っている。

また図鑑の活用ということで、子どもたちや村民の方々対象に、自然観察会を実施している(本年度は釈迦ヶ岳での植物観察、二津野ダム湖における水鳥の観察、十津川の動植物についての研修会。来年度はそれらに加えて魚類相調査や昆虫採集等を実施予定)。図鑑を片手に、十津川の自然や生物に触れ、親しんでいただけるよう工夫し、一層研究を深めたいと思っている。



2 成果及び課題

理科部会は小中学校の教師間の交流ということで、中学校の教科等研究会とはまた違った取り組みを行っている。特に中学校の理科教員がゲストティーチャーとして小学生と授業等で一緒に学べるのが大きい。小学生がどのような学習をし、どのようなことに興味関心を持っているのかを知ることができるとても貴重な機会となっている。十津川では、村内の4つの中学校と十津川高等学校との間で連携型の中高一貫教育の取り組みを行っており、中学校と高校との連携を深められているが、小学校と中学校の連携が意外とできないものである。これからは小中の連携も積極的に深め、小・中・高という長いスパンで、十津川の子どもたちをどう育てていくかということをしっかりと考えていかなければならない。理科部会の活動がそのような取り組みを深める一つとなるよう努力したい。

この理科部会での取り組みを通して、私たちは理科教員として授業以外での技量・力量を磨く機会に恵まれたと感じている。全国川サミットに向けての魚類相調査では、定置網や投網の技術的な面から様々な魚の生態まで、活動を通して得るものが多く、得たものを授業や「総合的な学習の時間」で広く活用することができた。魚が身近である十津川の子どもたちにとって、調査結果は関心事となり、ダムの魚類に与える影響を考える機会となった。そして、環境問題を身近なものとして捉えてくれた。また「十津川の自然案内」(動植物図鑑)を作製する中で、私たちは自然をより専門的に見つめることができ、知識や力量を高めることができたのは大きな収穫であった。ここで得た知識・経験や図鑑などを通して、子どもたちに十津川の自然を見つめてもらい、生き物が棲むことができる自然環境を残していくことの大切さを伝えていきたいと考えている。

一昨年、大峯奥駆道・熊野古道が世界遺産に登録され、多くの観光客や登山客で賑わうようになった。図鑑などを通して、村外から来られる方々にも十津川の自然のすばらしさを感じ、知っていただくと同時に、この自然をいつまでも残すことの意義、取り組みを考えてもらう活動を展開できればと思う。

3 その他参考となる事項

「十津川の自然」ホームページURL名 <http://www.geocities.jp/aogera55/index.html>

1 実践内容

本校は、部活動を中心とした体育活動に特色を有する学校として歩んできたが、今回の県立高校再編により、これまでの本校の教育実践を改めて検証する貴重な機会を得ることとなった。これまで受け継いできた「人を育てる教育」という本校の理念を堅持することを改めて再確認するとともに、生徒の知・徳・体にわたる調和のとれた全人格的な成長と優れた運動技能を支えるための「学力・精神力の育成と充実」を新たな課題として掲げ、学科改編と教育課程の編成に協議を重ねてきた。そしてこれらの教育課題を解決するために、次の5点について全員の共通理解を得た。心を育てること。すなわち、逞しい精神力・豊かな人間性の涵養を目指す教育内容を策定すること。これまでの体育科の特色・実績を普通科に反映させること。基礎・基本の定着を図り、発展的な学習を保障する学習支援体制を確立すること。体育や部活動での実技指導だけでなく、さまざまな教科が運動技能向上とスポーツ選手としての資質育成に寄与できるような教育課程の編成や教育活動を創造すること。「行事を通して成長する」ことをねらいとする本校の学校行事のあり方を特色としてさらに発展させること。これらに留意しながら以下の教育内容の改善・工夫に取り組むこととした。



(1) 学科改編と教育課程の編成

まず、体育科をスポーツサイエンス科に名称変更した。高大連携、課題研究への取組を通してスポーツ医学・力学等の科学理論にも触れながら、スポーツを多角的・科学的に探究する中で、質の高い運動技能を総合的に高めていくことがねらいである。また、専門科目を36単位設定する中で、2年次で1単位増加し、出来るだけ早い段階での身体づくりを行うことで、生徒の一層の伸長を目指すこととした。一方、普通科でも、スポーツを通して心身共に健康な人間の育成を推進する本校教育をより顕在化・拡充させるべく、従来の体育科の特色を反映させた「スポーツ文型」や、本校が理想とする高い次元での文武両立を実現していく「フロンティア型」を新たに設置した。加えて、授業時数の確保に努めるべく、各部顧問の理解・協力も得て過当たりの授業時数を31単位時間に変更した。

(2) 学校設定科目「スポーツマインド」の開設

保健体育科を含めた各教科の横断的な学習を通して、スポーツ選手として必要とされる基本的な知識を身に付けると同時に、競技力向上を支える強い精神力と豊かな感性を養うことによりスポーツ選手の資質育成、ひいては人間性の涵養に資することを目的として本年度、スポーツサイエンス科及び普通科「スポーツ文型」において、学校設定科目「スポーツマインド」を開設した。これにより体育活動を基盤にした「人を育てる教育」への推進に向け、教科を越えて取り組んでいく契機となることもねらいの一つになっている。具体的には、学期単位で以下の教科がその特性を活かして授業を担当する。

芸術科：音楽を通してリズム感の養成及びリラクゼーショントレーニングの習得を図り、書道により集中力の育成やプラス思考の構築を目指す。

家庭科：栄養の摂取や水分補給のあり方等に関する基礎知識を獲得させる。

理科：運動技能の構造を理解し、その上達を助けるためのスポーツ力学に触れ、科学的な視点からスポーツを捉える態度を養う。

保健体育科：身体機能の基礎知識を基に効果的な練習計画の作成及びスポーツ選手としてのあり方を学習すると共に、国語科の協力を得ながら研究論文指導を担当する。

(3)朝の読書活動・読み聞かせの実施

生徒の情操や感性の健やかな成長を願うと同時に、読書から得られる教訓・知恵がスポーツの場面においても心に勇気と強さを与え、競技力向上に活かされるように毎週1回、朝の読書活動に取り組み、4年目を迎えている。特に生徒が始業5分前に登校し、自主的に読書を始めるという自律的な態度を目標にしており、生徒指導の観点からも年度当初の5分前



朝の読書での読み聞かせ

登校・チャイム着席の習慣付けが非常に重要と考えている。また昨年度からは、読書活動にさらに変化を持たせ、生徒の思考力、集中力の養成を目的として司書による「読み聞かせ」を実施している。生の声で語られた言葉を意識的に聴くことは、パソコンの普及により記号化した言葉に馴れてしまった生徒に“言葉は生きたもの”であることを実感させること、視覚のみに訴える今の時代に“聴く”ことにより思考力が高められること、言葉の生きたリズムと響きが、生徒の五感を心地良く刺激すること、等の人格形成に与える教育効果について司書より提言があり、「人を育てる教育」実践の一つとして取り組むこととした。たしかにこれらの成果をすぐに見いだすことはできないが、こうした生きた言葉を聞く体験を通じて、ややもすると無機質な今の時代に置かれた生徒の心に潤いが与えられ、必ず心の中に豊かさが育つものと信じている。

2 成果及び課題

現在の本校の教育課程に移行して2年目を迎え、各学科及び各類型の教育効果をより高めていくために新たに出てきた実施上の様々な課題に、現在取り組んでいるところである。眼前の生徒をしっかりと見据え、生徒にとって本当に必要なものを見極めながら、生徒のための教育内容の整備に今後も引き続いて努力していきたい。特に昨今の社会の風潮を鑑み、心の教育・人間性の涵養に今まで以上に真剣に取り組む必要性を改めて強く感じているところである。とにかく今回の学校再編を機に本校が目指すべきもの、すなわち、“これからも大切に守りたいもの”、“新しく育てたいもの”が明らかになり、その実現に向けて学校全体として一つの方向性を持って歩み始めることができた。本校のこれからの一層の活性化を予感させるものとして大いに期待したい。そしてこうした歩みが着実なものとなり、本校のさらなる特色化が推進され、魅力ある学校に発展していくように微力ながら尽力していきたい。

3 その他参考となる事項

奈良県立添上高等学校ホームページ <http://www.soekami-h.ed.jp>

1 実践内容

本校には毎年多様な個性や学力を持った生徒が入学してきた。中学校までの基礎的な学力が定着していないため、学習意欲の低い生徒がいることも事実である。そのような中で、「自ら学ぶ」姿勢を育成し、自己実現に向けた取組を支え育てることが本校の使命であると考えてきたところであり、そのために「基礎・基本の定着」こそが重要であると捉え、ひいてはそのことが自己実現を含めた「生きる力」を育むことにつながると位置づけてきた。さらにこういったこと的前提となる関心・意欲等を喚起するため、どのように達成感を味わわせやる気を起こさせるかを検討しながら、学校全体で様々な工夫を行ってきた。



上記内容について、私自身が教務主任として関わったのは9年余であり、その間の取組について、主なものをまとめてみる。

(1) 学校設定科目（その他の科目）

平成8、9年度に文部省及び奈良県教育委員会の指定を受け研究が始まり、特別の委員会が設置され研究が進められたのであるが、私自身が直接関わったのは後半、平成9年度からである。平成8年度の研究を継続し、それを具体化する作業であった。

生徒の学習意欲を喚起し、個性を伸長させる事を目標に、既存科目にとらわれず、主体的に取組み、生涯学習につながる内容ということで、学校をあげ様々に検討したのであるが、結果的に「実践現代文」「現代文鑑賞」「古典鑑賞」「日本史研究」「政経時事」「地球の環境」「楽しい美術」「暮らしの中の書」「音楽～作ってつくろう～」「実用英語」「英語ゼミ」等の科目を設定し、平成10年度より実施することとなった。第3学年で各科目から1科目（2単位）を選択するのであるが（各科目は同時開講）、1科目あたりの受講人数が少なく、この面でも効果が得られた。

潜在的な学習意欲を引き出したのみならず、後の「多くの選択科目の設置」「少人数指導」「総合的な学習の時間」などにつながる大きな意味を持つものであったと考えている。

(2) 少人数指導

平成12年度より1年次で「数学」4単位「英語」3単位について原則2クラス3講座の習熟度別学級編成を実施している。

学力の高い生徒の学力向上面でも効果はあるが、低学力生徒の学力の底上げが確実にできた。目が届きやすく、各講座がクラスを解体してできているため、生徒が緊張感を持って授業に臨むなど、本校の実態から実に適切な指導方法であったと考えている。

現在習熟度別授業を実施している学校はたくさんあるのではないかと思うが、本校は早い時期からの実施であり、かなり不安も抱えながらの出発であったが、素晴らしい成果が得られたのではないかと自負している。

(3) 教育課程の編成

学校の実態の変化に対応するべく、教育課程の類型にも工夫を重ねてきた。

従来、2年次より文科型、理科技型、情報科学型に分かれていたものを、平成13年度より2年次から文理型（文系、理系）、情報科学型（文系、理系）の4つの類型に分け、さらに国語、地理・歴史、数学、理科の各教科でその科目に類型によって大きく違いを設けてきた。

類型の工夫と併せ、開校時よりの特色である「情報教育」に関する科目の単位数を、共通のカリキュラムである1年次で増加し、前述の「学校設定科目（その他の科目）」と組み合わせながら、生徒の実態にある程度対応したものにすることができたと考えている。

(4) 職員研修

教務部主催の研修会のうち、特に平成16年の夏期休業中に実施したものは内容の濃いものであった。まず4つのテーマで分科会を実施し、日を改め、各座長が報告する全体会を設けた。テーマは、本校の課題は何かを教務部内で考え整理したものである。

- (テーマ) 基礎基本を定着させる学習指導の在り方について
- 基本的な生活習慣を確立させる効果的な指導方法について
- 進路に向けて主体的に考え取り組ませる工夫について
- 校務運営における諸問題および在校生のための施策について

各分科会とも真摯な話し合いが行われたが、特に「基礎基本の定着」を「生きる力を育むこと」と捉え、基礎基本とは具体的にどのようなものか、授業内容をどう見直すのか等議論され、何を教えるのか、どのような生徒に育てたいのかについて一定の共通理解が得られたことは大変大きな意義があったし、「生きる力」育成の具現化にまた一歩近づくものであったといえる。併せて、このような形の研修会が実施できたことは非常に画期的なことであったと考えている。

2 成果及び課題

上記取組等を通し、生徒の実態の変化に即しながら、教育課程編成の上で様々な工夫、改善してきたところである。特に「学校設定科目」については、変化に柔軟に対応できるという点で、興味・関心を喚起するには適したものであり、科目によりバラツキはあるものの一定の成果が得られた。「少人数指導」においては、様々な課題、心配される事項があったが、成績不振生徒数が減少するなど良い面の方が多かったのは確実である。また、より良い教育課程の編成をめざし、試行錯誤の上で実施した職員研修の形は、今後は是非とも他の機会にも実施してみたいと思う。

一方、「学校設定科目」「少人数指導」等、成果はありつつも逆にその長所を十分に生かしきれたか、もっと質的・量的な拡大が出来たのではないかと様々な課題も生じてきた。上述の取組に限らず様々な取組を深めたり前進したりする上で、教師の共通理解の徹底が非常に重要であることを強く実感した。

3 その他参考となる事項

奈良県立志貴高等学校ホームページ <http://www.shiki-hs.ed.jp>

事例番号25 高等学校 学校教育目標の具体化の部

人間探究コース設置に伴う特色化について

- 「地域の幼稚園・小学校との連携及び高大連携」 -

奈良県立榛生昇陽高等学校 教諭 市川 雅利

1 実践内容

県高校統合再編計画により、平成16年度に室生高校と榛原高校の統合校として榛生昇陽高校が誕生した。両校が培ってきた「豊かな心」を育むことと、その心に裏打ちされた「確かな学力」を身に付けることを基本理念として、少子化や地域の課題に対応した文化の創造、教育の振興という社会や時代の要請に応え、将来、幼稚園・小学校教員を目指す人材の育成を図る目的で、普通科に人間探究コースが設置された。この人間探究コースの特色として、地域の幼稚園・小学校での補助体験実習やボランティア活動及び高大連携を通じてその特色化に取り組んだ。



(1) 地域の幼稚園・小学校との連携とボランティア活動について

平成17年度より2年生を榛原町内（現宇陀市）の幼稚園・小学校において運動会の補助体験実習の一環として、園児・児童が本校生に慣れてもらうことを目的の一つとして、6月からプール授業の補助（プール監視）、お誕生日会の手伝い、運動会前の準備作業（グラウンド整備・準備物の制作・打ち合わせ会議）・運動会当日の補助を行った。また、遠足の補助員、園外保育の補助、コンピュータ授業のアシスタント等の体験実習を行った。平成17年度は幼稚園2校、小学校2校でスタートしたが、平成18年度は宇陀市内の幼稚園4校、小学校3校で実施を計画している。

また、地域との連携を図るため、榛原高校の時代より培ってきた福祉科を中心としたボランティア活動の一環で、人間探究コース1・2年生がボランティア活動として榛原町（現宇陀市）の子どもフェスティバル、町民体育大会・文化祭等のボランティア活動を通じて、ボランティアの運営や幼児・児童との接し方を活動を通じて学んだ。



補助体験実習（運動会の補助）

(2) 高大連携について

人間探究コースでは、《人間》をキーワードに、「基礎心理学」「ボランティア学」などユニークで多彩な学校設定科目を設定し、大学と連携し、大学の先生の専門的で興味深い授業を足がかりに学びへと誘うため、1年生から高大連携を取り入れた。提携校及び出前授業等を活用した形ではあるが、平成16年度は3件（6時間）、平成17年度は7件（14時間）の授業を行った。平成18年度は9件（18時間）の授業を予定している。テーマは多岐にわたり、平成16年度は「野生動物と自然のバランスについて」、

「家族と人生について」、「ウェルネススポーツについて」、平成17年度は「ことばとコミュニケーション」、「色彩に目を向けよう」、「地域支援とレクリエーション」、「栄養素のはたらきについて」、「ニュースポーツ」、「スポーツ活動と水分補給」、「障害」の概念について」で実施した。平成18年度は「色の見え方 - 色の不思議を発見 - 」、「自然生態系の多様性って何だろう」、「やめられない、とまらない、おやつのお不思議」、「赤ちゃんのふしぎ（発達心理学）」、「バイタルサインと介護」、「絵本の中の子どもたち」、「ニュースポーツ」、「発達心理学 - 子どもの認知の発達 - 」、「生活環境と緑」等を予定している。



高大連携の授業風景

提携校は奈良佐保短期大学、出前授業依頼校は夙川短期大学、大阪千代田短期大学、人間環境大学、京都女子大学等である。

2 成果及び課題

平成16年度から年を経るごとに、高大連携事業の充実が図れ、生徒の学びへの興味・関心が高まった。また、広報活動においても新聞等の取材を通じ、人間探究コースの知名度を高めることができた。平成17年度から幼稚園・小学校との連携による補助体験実習においては、児童との関わりを通して教室だけでは学ぶことができない、“人と人との関わり大切さ”を体験から学び取ることができた。また、修学旅行（韓国）では、現地（ソウル市）のクンパ保育園との交流会において、補助体験実習の経験を生かし、園児との十分な交流ができた。実習後の生徒達を見ていると、園児・児童が高校生を育ててくれているのではないかと思える成長が見受けられた。さらに、地域での様々なボランティア活動を通じて、地域の人々との交流も図れ、地域の強い信頼を得ることができた。

ただ、これらの事業を具体的に実行可能な状態にするためには、年度初めの4月以降でない限りと明確にならないため、計画・交渉も1学期前半ということになってしまう。そのため、学校行事での位置づけが後入りになってしまい、行事の隙間を縫っての計画となり、自転車操業的な要素が強く、計画的に進められているとは言い難い状況である。3年目を迎え、事業の充実及びその成果、学校としての事業の体系化、生徒の進路実現等の問題もある。今後、これらの事業を学校行事の中でカリキュラム化していくため、生徒・保護者の意見を聞きながら教職員一同で課題克服に取り組んでいきたい。

3 その他参考になる事項

奈良県立榛生昇陽高等学校ホームページ <http://www.pref.nara.jp/koko/shinseisyouyo/>
クンパ保育園ホームページ <http://www.kumpa.or.kr/>

事例番号26 高等学校 学校教育目標の具体化の部

「スポーツをとおしての人づくり」生涯スポーツ科設置への取り組み

奈良県立大和広陵高等学校 教諭 吉岡 健蔵

1 実践内容

本校は過去に、全国選抜高校野球大会・全国高校サッカー選手権大会に出場した実績があり、部活動の活躍による学校内の活気と、けじめある学校生活の確立を目指し、スポーツ活動を中心にした学校づくりが進められてきた。そうした中で、運動部の強化と共に運動部員だけでなく、一般生徒にもスポーツに親しみ、楽しむ機会を多く作るために、体育の授業で、全学年において選択授業を展開し、体育嫌いの生徒なくし、積極的に体育に参加する体制を作った。その中で挨拶や、集団行動の重要性も指導してきた。



さらに本校の発展を目指し、体育科設置を見据えて、近畿圏の体育科・コースを設置している学校を訪問し、本校の目指す体育科の在り方を検討した。その結果、本校の教育目標の一つとして打ち出されていた「スポーツをとおしての人づくり」を大きな柱とし、トップアスリートの育成はもちろん、もう一つの目標として、生涯スポーツに関わっていただける資質を身につけることとした。

<生涯スポーツ科における特徴のある授業>

(1) 学校設定科目（生涯スポーツマネジメント）

ニュースポーツを競技スポーツあるいは教科スポーツとは異なった視点で捉え、誰もが、いつでも、どこでも楽しめるといった、レクリエーショナルな運動、スポーツであることを理解する。

また、ニュースポーツを生涯スポーツとして位置づけ、それらの知識、技術、指導法の習得を目指す。

(2) 体育理論

一般的にとりあげられる体育理論の内容以外に、生涯スポーツの現状と課題についての内容を学習する。

(3) 外部講師による授業

奈良県立医科大学の保健体育科教員を招き、実用的な「スポーツ医学」「スポーツ生理学」の講義を各学年、1回～2回（1回2時間）程度実施。

(4) 実習

a 第1学年

・キャンプ（独立法人曾爾青少年自然の家）

野外炊飯、ネイチャーゲーム、登山ハイキング、ソロキャンプ

・障害者スポーツ体験（県立心身障害者社会福祉センター）

車いすバスケット等、他数種目を実施する。

b 第2学年

・日本赤十字救急法講習会（本校）

日本赤十字社奈良県支部指導員のもと4日間の正規講習を受講

検定合格者は救急法救急員の資格を取得

- ・障害者スポーツ体験 第1学年に同じ
- ・スキー（修学旅行、信州方面）

3級バッチテスト実施

c 第3学年

- ・マリンスポーツ（阿南国際海洋センター）
ウインドサーフィン等マリンスポーツ体験
- ・ゴルフ（スポーツヒルズ大阪）
ミニコースでのゴルフ体験



カヌー体験

2 成果及び課題

本校のモットーである「スポーツをとおしての人づくり」を目指して、学校全体が体育行事、部活動に取り組む中で、生涯スポーツコース・生涯スポーツ科の生徒や運動部員の生徒たちが中心になり率先して行動していることは、一つの成果として考えることができる。特に、ほとんどの生徒達が大きな声で挨拶ができるようになったのは、生涯スポーツコース・科の生徒や運動部員から一般生徒へ反映された結果である。

また、自分たちの仲間が競技する姿を観戦することで感動を貰い、世界大会や全国・近畿大会で活躍する姿を見て、仲間を誇りに思うとともに、自分達に通っている学校にも誇りを持つ心が芽生えてきている。

生涯スポーツコース・科の生徒にとっても、授業や普段体験できない実習により、集団行動や協力の大切さ、並びに仲間を思いやる心、ルールを守ること等を身につけ、将来、スポーツに親しみ実践する能力を養うことができているのではないかと考える。

今後の課題としては、体育系コース時代からの課題であった進路保障の問題がある。今までも競技実績の高い生徒は、スポーツ推薦で体育系大学に合格する者もいたが、競技実績の乏しい生徒はなかなか体育系の大学に合格することができなかった。体育系コースから体育科になることで、一部の体育系大学から指定校の枠を得ることができたが、今後更に、競技力の向上はもちろんであるが、学力の向上を図る必要がある。

また、将来、スポーツ競技者として活躍してくれることも指導者としての楽しみの一つであるが、あらゆる規模でのスポーツ大会に、企画・運営・補助員として関わっていただける資質を育成するために、補助員として参加できる範囲で、多くのスポーツ競技会にボランティアとして参加し、その現場で、今まで競技者としてしか見えてなかったもの以外のことを知ること、生涯をとおして様々な立場で、スポーツに関わっていくことができることを学習してもらいたい。これらをとおして、競技者として競技会に出場する際に、多くの人達のおかげで競技ができる「感謝の心」を養うことができ、より優秀な競技者となってもらいたいと願っている。

3 その他参考となる事項

奈良県立大和広陵高校ホームページ <http://www.koryo-hs.ed.jp>

1 実践内容

県内の高等学校が統合再編の中、平成17年度より本校は単独で出発することになり、教育課程や制服の変更の検討に入り、新たな香芝高校への歩みが始まった。その1年前（平成16年度）、新生香芝高校への過渡期の年に、新1年生の学年主任を拝命した。新たな香芝高校へと続く橋渡しの学年となるよう、3年間を見通した教育方針を構築し、学年教師集団が一致協力して、生徒の教育・指導に当たることを目標とした。そのために、次の3つの項目を柱に据えた。



- (1) 生徒の教育にあたり、「心の教育」を中心に据えること。
- (2) 学年教師間で、指導に対し常に統一見解を持ち、情報交換を密にすること。
- (3) 生徒の指導に対し、保護者の協力を全面的に得られるようにすること。

方針自体は何ら目新しいことがなく、ありふれたものではあるが、その当たり前のことがなかなか実践できないのが常であり、教育の基本に戻ることとした。

(1)に関して、常に速やかに生徒の状況把握に努めることを目標とした。日頃の生徒の動向をいち早く把握できるように、授業はもとより、ほぼ毎日、朝の昇降口での指導、昼食時等の休憩時に廊下等での立哨指導を行い、生徒と接する時間をできるだけ多く取った。朝の挨拶から日頃の「ちょっとした会話」を通して、その日の顔色・態度・雰囲気、生徒の精神状態の変化の把握に努めた。また、カウンセリング的役割を担っている養護教諭との連絡を密にすることで、生徒の精神的な動向をいち早くつかむことができた。学年集会では、「人への思いやりの心」「豊かな心」を持つことの大切さを力説した。日頃の何気ない言動に喜びを感じた出来事等を紹介しながら、一人一人の言動がいかに人の心を豊かにし、楽しい生活に繋がるかを説いた。特別指導の際には、個別に対話する機会をフルに利用し、親や教師の思い・願いを切々と話し、作業を共にしながらその苦しみや成就感を共有することで「人として何が大切であるか」を話す機会とした。また、親だけでなく担任や他の教師にとっても、「生徒一人一人が大切な存在であること」、「どれだけ大切に思っているか」を話した。2年生では、朝のSHRを利用し、「コラム・リーディング」を行い、いろいろな人の思いや考えに触れさせながら、「人としての大切なものは何か」を考える機会を与えるように努めた。

(2)に関して、クラスの動向を担当から常に連絡・報告を受けながら情報収集に努めた。学年会議だけでなく、職員室での「何気ない会話」から、生徒の授業の態度・精神状態・家庭状況などの情報を得ることが多く、教師間の情報交換と共通理解が図られた。朝の昇降口指導には、副担任の先生方も参加する姿勢が自然とでき、副担任の先生方にとって、学年の生徒達を理解する場となった。担任だけでなく、副担任や他の教科担任からの情報を得ることで、一人一人の生徒の変化にいち早く気づき、生徒への「声かけ」ができ、多くの先生方からその生徒へのアプローチができた。学年の先生方全員が、それぞれの特性を生かし、時にはよき相談役として、時には厳しい指導者として活躍され、一致団結した指導ができた。毎日、学年連絡板を事細かに書くことで連絡の漏れ落ちの

ないように努めた。また、教育課程においては、1年先取りして新しい教育課程を発足させた。「総合文科」「人文科学」「自然科学」の3類型に分かれ、それぞれの類型の特徴を生かした教科指導をお願いした。文系3教科中心の「総合文科」の生徒には、国語を中心に基礎基本の知識習得に、5教科中心の「人文科学」の生徒には、英語を中心に基礎基本から応用力に至るまでの知識習得に、また、理系教科中心の「自然科学」の生徒には、理科・数学を中心に課外補習等でその教科に力を入れていただいた。

(3)に関して、入学式の日、「保護者と教師は一枚の布の縦系横系の関係」であり、うまく絡み合って初めて一枚の布が完成するように、保護者の協力なくして、子供の教育はできないことを訴えた。その後、保護者が来校する機会には、生徒の状況をできるだけ詳しく話し、よいことは褒め、改めるべきことには協力をお願いした。学年主任として保護者に会う機会は、特別指導を行うときが多く、あまり良い状況ではない。そんなときではあるが、まずは「生徒の良い点・褒める点」から話すことを心がけた。回を重ねるたびに、保護者が子供の教育に迷いや行き詰まりを感じていることも分かり、教師が子供の教育の一端を担う協力者であることを理解され、子育てに協力していることに対し、感謝の気持ちを抱かれ涙される場面があった。保護者から相談を受け、「子供の心がつかめず、どうすればいいか教えてほしい」との依頼を受けることもあった。保護者の姿勢が協力的になるにつれ、生徒が成長し変わっていく姿をみることができた。

2 成果及び課題

3年間の営みの中で、生徒の意識変革ができたことが最大の成果であると思える。他学年の先生方からも「生徒に思いやりの心がある」という言葉をいただいたり、「素直で素朴である」とも言っていた。全体として、思いやりがあり素直な生徒に成長したと思える。教師の話に耳を傾ける心があり、素直に受け止めているように思える。

学年の先生方の協力体制ができたことが成果の大きな要因である。担任の中にも「一人で取り組まねばならない」という孤独感や焦燥感がなく、教師集団のお互いの力を発揮しながら助け合っていく体制作りができあがっていったように思える。また、進路に対しても、2年生からの類型選択の特徴を生かし、早期から取り組む姿勢が現れ、授業に臨む姿勢や進路選択にも真剣みが感じられた。

保護者からの理解や協力を得ることができ、三者一体となった教育活動ができたことも、成果の最大要因であった。時には、保護者からの苦情やお叱りをいただいたこともあるが、その都度、ご理解をいただけるように説得に努めた。「この子をどのように成長させたいか」という思いは、保護者も教師も共通したものであり、その思いが根底にある限り、信頼関係は崩れないと確信しながら問題解決に当たった。

最近の若者の傾向と同じように、ストレスやプレッシャーに弱い生徒が多く、人間関係のトラブルや進路の不安に悩み、多くの問題を抱えている生徒が多いのが現状である。一人一人が抱える問題に根気よく耳を傾け、ともに考えてやる姿勢が、教師に求められている。時間のゆとりがなく、適時にその時間がとれないときもあり、指導に遅れを感じたことがあったのは残念であった。

すべての教育問題において、早期発見・早期解決が最大の課題であり、そのためには絶えず情報交換できる雰囲気作りと相互協力の体制作りがますます重要であると思える。学年集団の先生方に対し、その体制作りができたことに深く感謝している。

1 実践内容

私が本校に赴任した平成8年は、特色ある学校づくりとして、斑鳩高校で歴史文化コースが立ち上がった年であった。当時、履修すべきコース内容の準備に地歴科教員が追われていたが、幸運なことに、私にも学校設定科目である『日本文化史』や『民俗学』のシラバスを作成する機会が与えられた。また後には、地歴科教科主任や法隆寺国際高校の歴史文化科長もさせていただき、歴史文化コース(科)のため、微力ながらお手伝いすることもできた。



[教科担当として]

『日本文化史』(法隆寺国際高校では『仏教美術』として設定)は、飛鳥文化から鎌倉文化までの仏教美術について学ぶ授業とした。現地見学の回数を多く取り、日本美術を積極的に鑑賞する生徒を育てることを目指した。授業は、「()事前学習 ()仏教美術の見学・鑑賞 ()レポート作成」という流れを、ワンサイクルとして実施した。()は、見学を単なる「遠足」に終わらせないため、欠かすことができない。彫刻・工芸・建築の基礎知識、各時代の文化の特色、訪問地の歴史的背景を、スライド・ビデオなども用いて展開した。()は、文化財に恵まれた奈良の地域的な特性をフルに利用した。2年次では法隆寺、東大寺、興福寺(写真参照)、室生寺などを、3年次では平等院、酬恩庵などを訪れた。

()では、事前学習や見学地で知り得たことを、レポートにまとめることにより再確認させた。また、見学した際の感想も書くように指示し、自分の気付きや発見による感動を表現させることにした。

これらの実践は、全国歴史教育研究協議会第44回研究大会で発表する機会を得た。

『民俗学』では民間伝承を素材として、日本の伝統文化について学ぶ授業とした。民俗学の基礎知識、『遠野物語』などの柳田国男の著作の紹介、奈良県の伝統産業・食文化・年中行事などについて授業を展開した。また、宮座行事を見学するため学校近隣の神社を訪れたり、安堵町歴史民俗資料館・県立民俗博物館・国立民族学博物館を、学芸員の先生方等の解説の下に見学したりした。さらに、伝統菓子であるしんこもち(写真参照)やしめ縄などを作る体験学習も取り入れた。これらの見学や体験学習でも生徒にレポートを課すことにしている。



[教科主任・学科長として]

年度末に関係機関や外部講師との打ち合わせを行い、次年度の歴史文化専門科目の年間予定を決定した。また、外部講師への依頼文作成、保護者への経費依頼、バス会社との交渉なども行った。

本校が「まほろば創生・なら教育特区」の認定を受けた結果、歴史文化科の活動の幅をさらに拡大させることができた。具体的には、()世界史に代わる日本史の必修修化、()学校外での学修や各種の資格試験受験を生徒に積極的に働きかけ、増加単位として認定すること、()歴史文化学習のまとめとしての歴史文化フォーラムの開催、が実現した。()については学校近くの、いかるがホールを使用し、以前より大々的に歴史文化コース(科)の取り組みを発表できるようになった。また、研究者による講演や、安堵町の民俗文化財である六斎念仏の実演をしていただくなど、意義深いフォーラムとなっている。



推進校として「奈良学習旅行プラン」の作成に取り組んだ。これにより、歴史研究部の生徒たちが、安堵町の伝統産業である灯芯引きと富本憲吉記念館を紹介するプランを作成し、発表することができた。今年度も部員たちは斑鳩・安堵地域の魅力をいかに伝えるか、活動を続けている。

2 成果及び課題

これらの実践を通して、つぎの諸成果が得られたと考える。主に奈良県の文化遺産について、見学・体験をふくめて学習することにより、生徒の歴史・文化への興味・関心を促し、認識を深化させたこと。今年7月に実施したアンケート結果からも、多くの生徒・保護者が歴史文化コース(科)の学習内容について、「おもしろい」「必要である」と肯定的にとらえていることが確認された。学校設定科目の学習が普通科目の日本史を学習する際、補完的な意味合いをもち、日本史の内容理解にプラスとなったこと。レポートを作成させることにより、生徒の観察・鑑賞力や文章表現力を高めたこと。

高校3年間で、徐々にではあるが、主体的に学習に取り組む姿勢や郷土の文化財を愛し、保護する気持ちを育成させたこと。教育特区認定により、休日を利用して法隆寺ボランティアガイドに参加する生徒、地元の芸能や文化に接しようとする生徒、歴史能力検定にチャレンジする生徒などを増加させたこと。歴史文化フォーラムが、授業『課題研究』での班別研究を発表する大切な場となったこと。現3年生の中には、ここでの発表を楽しみに『課題研究』に熱心に取り組んでいる生徒もいる。

これらの実践活動は、外部講師の先生方、協力していただいた保護者の方々等の協力がなければ実現できなかった。とりわけ、教科主任・学科長としての実践は地歴科教員の協力によるものであり、諸先生方には深く感謝している。歴史文化コース(科)が軌道にのった今、授業内容や歴史文化科のあり方について、教員間の連携・研修を深め、さらに充実にむけて検討していきたい。

「実験・観察」を中心とした理科教育の実践

奈良県立御所工業高等学校 理科・教員グループ

代表 教諭 浅田 剛

1 実践内容

本校は、今年創立以来107年の歴史を持つ県内最古の工業高等学校で、機械科・土木科・薬学科・電気科の4学科を設置し、機械科は各学年2クラス、その他の学科は各学年1クラスのクラス編成で全学年で15クラスの中規模の工業の専門高校である。



本校の理科の教員は教諭3名、実習助手1名の構成である。

本校の理科のカリキュラムは、1年次に機械科、電気科、土木科は「理科総合A」2単位、薬学科は「理科総合B」2単位を履修させている。2年次では機械科、土木科、電気科は「物理」、薬学科は「化学」、そして3年次では2年次のそれぞれの科目を継続履修させている。

さて、本校の教育方針である「ものづくりは人づくり・夢づくり」を基本テーマとして理科教育の実践を図るために各学年において、「実験・観察」を中心にすえた生徒が主体的に取り組む授業を実施している。下記に主に1年生で取り組んで来た理科教育の実践を述べてみることにする。

(1) 生徒の実態

専門高校でありながら意外と理科への興味関心が低く、計算能力も不足している生徒が多いのが実態である。しかし、理科教育は工業の専門教科の基礎であり、1年次から「理科総合A」、「理科総合B」とも2時間連続の授業で実験、観察、ものづくりを中心として、生徒の興味・関心を引き出すように努めている。知識学習だけでは味わえない、主体性を持った、探求心に富んだ生徒を育てることを目標としている。

(2) 授業の形態

1年次の「理科総合A」、「理科総合B」とも2時間連続の授業であり、1クラスに理科の員4名が全員指導にあたり、個々の生徒にきめ細かい指導をしている。また、本校の約60%の生徒が就職希望であり、キャリア教育の一環として1年次から礼儀を身につけさせることが大切であるという観点から、例えば授業の始まりと終わりの礼をきちんとさせることや授業時に危険を防止させるために、必ず体操服や実習服を着させる指導を行っている。毎回、実験レポートを書かせている。その中に実験の感想や疑問点などを必ず書かせている。ファイルに綴じ提出させ評価している。中間・期末の定期考査は実施し、レポートや実験態度を含めて総合的に判断して成績をつけている。

また、夏期休業中の課題として「理科総合A」は工夫を凝らした元素の周期表の作成、「理科総合B」は人体の解剖図を作り提出させている。そして、その中の代表的な作品を本校の学校祭で展示して、好評を得ている。

< 1年次に実施している実験テーマ >

「理科総合A」(機械科・電気科・土木科の生徒が履修)

- | | |
|-----------------|-------------------------|
| (1) 実験を行うにあたって | (16) 洗剤の化学 |
| (2) 物質の性質 | (17) 高分子化合物 |
| (3) 実験・観察の基本的態度 | (18) かおりの化学 |
| (4) 物質の溶解 | (19) 葉脈標本の製作 |
| (5) 酸と塩基の性質 | (20) ブロンズを作る |
| (6) 中和反応 | (21) スライムを作る |
| (7) 水溶液の性質 | (22) 電気エネルギーを利用してパンを作る |
| (8) 元素の確認法 | (23) 豆腐を作る |
| (9) 窯業製品の製作 | (24) 牛乳の成分の分析 |
| (10) 金属の反応 | (25) ヨウ化窒素の爆発(演示実験) |
| (11) 金属のイオン化傾向 | (26) ガラスづくり及びガラス細工 |
| (12) 酸化・還元反応 | (27) ポップコーンを作る |
| (13) 電池の原理 | (28) ドライアイスを作った実験(演示実験) |
| (14) プラスチックの性質 | (29) ゴミ袋を用いた気球の制作 |
| (15) 有機化合物 | (30) 海底火山の爆発(演示実験) |



授業風景

<これから取り組もうとしていること>

・化石づくり

本物の化石からレプリカをつくる

過去の生物の研究をする

・ピンホールカメラ

空き缶からつくるピンホールカメラ、撮影現像を含めた光の性質の探求



ピンホールカメラ

2 成果及び課題

「実験・観察」を中心とした理科教育の実践を通じて、本校の教育方針である「ものづくりは人づくり・夢づくり」の基本テーマとした生徒の育成を1年次から身につけさせて、専門教科への基礎づくりを果たしていると思われる。また、入学当初理科の好きな生徒は2割程度だったが、学期を重ねるにつれて理科が好きな生徒が増えてきている。レポートに感想の項目があるが、「理科の授業が毎回実験なので楽しくて、次回が待ち遠しい。」あるいは「理科が一番興味のある授業」である等の感想が多々ある。

そして、グループとして実験・観察を取り組ませることにより、生徒同士の仲間意識も芽ばえ、疑問に感じたことを記述できる能力が身につき、知ろうとする探求心も養えたと思われる。

今後の課題は、より新しいテーマに挑戦することである。そして、個々の生徒に対応したよりきめ細かい指導に努めていきたい。

3 その他参考となる事項

奈良県立御所工業高等学校 ホームページ <http://www.gose-th.ed.jp/>

1 実践内容

農業教育に携わって20年、農業に興味をもたずに農業高校に入学してくる生徒が多い中、生徒に「やりがい・生きがい・自信」をもたせるために取り組んだ教育活動の中から、次の2つの実践を報告する。



(1) 科目「生物工学基礎」における実験・実習の取組

奈良県内で、「生物工学」の学習が独立した科目として指導されていなかった昭和62年、農業教育におけるこの分野への早急な取組の必要性を感じた私は、前任の田原本農業高校において、第1学年の科目「総合実習」の中で生物工学の導入部における指導を、小さな無菌箱を使った実験から始めた。その時の生徒の反応は、農業の学習でこんな理科的なレベルの高い実験・実習もするのかと驚いた様子であった。その後、クリーンベンチ（無菌空間を作り出す装置）の導入に伴い、多種多様な実験・実習に対応するための「教師用指導書」「生徒用ワークノート」を自主作成した。また、その後新設された生物工学実験実習棟の基本設計や運用マニュアルの作成にも携わった。そして、新設科目「生物工学基礎」4単位分の学習指導計画を作成し、最終的には生徒全員に「植物細胞の細胞融合実験」を体験させ、成功に導き、「生物工学基礎」の学習指導を軌道に乗せることができた。

本校着任後、まず前任校で作成した「教師用指導書」や「生徒用ワークノート」を本校の実態（生徒・実験器具・履修学年等）に応じた内容に編集し直すとともに、多くの実験・実習を体験する中から知識や技術を身に付けさせたいとの思いから、生徒が興味・関心のもてる実験材料・内容の厳選を進めた。

(2) 科目「農業科学基礎」及び「課題研究」における樹木治療の取組

この取組は、農業高校において第1学年で履修する科目「農業科学基礎」で学習する農業クラブ活動やプロジェクト学習を第3学年で履修する科目「課題研究」に繋げる形で実施するものであり、学年の枠を超え、先輩から後輩へと受け継がれた取組でもある。前任校においては、平成7年から5年間、校内の枯れかけたシダレヤナギの治療を手がけ、その知識・技術を地域にフィードバックさせるべく一般家庭の樹木治療に取り組んだ。そして、樹木医の先生の指導の下、5年に及ぶ試行錯誤の末、樹木の傷口に「墨汁」を塗り、空洞部には園芸資材である「パーライト」を詰め込み、その表面を「モルタル」で覆うという「樹木治療の墨汁・モルタル工法」を確立させた。

本校においては、平成13年度より6年間、一般家庭で誰もが樹木を治療できる「樹木傷口癒合剤」の開発研究に生徒たちと取り組んでいる。校内にある「ケヤキ」と「サクラ」を実験対象樹木とし、癒合剤の「基材」や「添加物」、そして、その「配合歩合」について研究を進めてきた。基材には、「モルタル」や「石膏」、漏れ防止用の「変形シリコンポリマー」や木工用ボンドの主成分である「酢酸ビニル樹脂」、石油から抽出した「ポリブデン」等を候補に挙げた。また、抗菌・抗カビ・防虫効果のある添加物としては、「チオファネートメチル」や「硫酸オキシキノリン」等の農薬（殺菌剤）や天然素材である「木酢液」を候補に挙げ実験に取り組んできた。

経過観察に時間と期間を要する研究ではあったが、この数年に及ぶ実験の結果、基材は「酢酸ビニル樹脂」と「ポリブテン」の混合物とし、そこに「木酢液」を添加して、抗菌・抗カビ・防虫効果が高い「樹木傷口癒合剤」を開発することができた。現在、この癒合剤の耐久性を調べる実験を継続中である。

また、この研究成果が新聞でも大きく取り上げられたこともあり、現在、造園業者だけでなく一般の家庭でも使用いただいている。



H17.8.23 朝日新聞 奈良版

2 成果及び課題

(1) 科目「生物工学基礎」における実験・実習の取組

毎年、この授業の中で同じ言葉を生徒から聞く。「この器具触ってもいいの。」「壊れへんかなあ。」「うまくいかんかっても怒らへん。」「緊張するわ。」等々。中学時代、何らかの理由で理科の実験に参加できなかった生徒の声だ。私は「君らの実験器具や。何でも自由に使っていいよ。壊れても怒らないよ。どんな実験も簡単や、みんなにもできる。」すると、生徒がにっこり笑う。目が輝く。彼らの心に「やりがい・生きがい・自信」の種火がつく。土壌が相手の農業だけでなく実験室の農業に取り組むことで、彼らの心の中にある農業に対する偏見や現状の自分に対する劣等意識が取り除かれ、新しいプライドが彼らの心に生まれるようになる。生徒が生徒の技術指導を始めることもあった。このように、「生物工学基礎」は生徒の心を磨く教科になった。

今後は、実験で生産した植物を地域社会に提供し評価を受けるなどして、学校や生徒の取組をより理解していただけるような地域連携型実験実習指導マニュアルの作成を計画している。



クリーンベンチ内無菌操作

(2) 科目「農業科学基礎」及び「課題研究」における樹木治療の取組

この研究に携わった生徒たちは、農業クラブの研究発表大会に出場し、「樹木治療の墨汁・モルタル工法」については、平成9年に県大会・近畿大会で最優秀賞を受賞し、全国大会でもその成果を発表した。また、「樹木傷口癒合剤」の開発研究については、平成15・17年度の2回、県大会で最優秀賞を受賞し、近畿大会でも発表した。さらに、NHKラジオからも出演依頼があり、研究成果を近畿各地に伝えたことで一般の方々からも大きな反響を得ることができた。

この研究を通じて、生徒たちは環境保全や命の大切さを学んだ。また、地域の方々に自分たちの存在を認めてもらえたという思いや成就感、自己有用感を感じさせることにより生徒に大きな「やりがい・生きがい・自信」を植えつけることができた。

今後、この「癒合剤」の保存方法の研究と広く普及に向けた取組を計画している。

3 その他参考となる事項

奈良県立御所東高等学校ホームページ <http://www.gosehigashi.ed.jp>

1 実践内容

生徒指導を担当して22年になる。この22年のなかで感じることは、時代の変化とともに生徒もかなり変わったことである。教師になりたての時は、教師と生徒の隔たりを感じることもなく、本音でぶつかりあうことができた。

しかし、現在ではなかなかこちらの思いが生徒に通じないことが多い。そんな状況の中で、青翔高校は3年前に御所高校から生まれ変わり今年でやっと3学年が揃った。

本校開校とともに、生徒指導部長を任せられ学校づくりに励んできた。「失敗は許されない。」を合い言葉に全職員が一丸となって取り組んできた。開校初年度は、1学年だけでかなり厳しい指導を繰り返した。「みんながこの学校の土台、基本になる。」ことを言い続け、その期待に応えてくれたと確信する。しかし、学年が増えるにしたがい問題も起きてきた。その指導をしていくなかで、指導を素直に受け止める者がほとんどだが、素直に受け止めることができない生徒が増えてきた。ここが、生徒が変わったと感じるところである。自分のしたことを冷静に見つめ反省することができず自分を守ることになってしまう。そこに、保護者も同じく子供側にまわることもまれではない。学校運営は、学校と家庭が連携を密に取り合わなければいけないのに、前向きに進まないことに歯がゆさを感じる。もちろん、学校によっても違いはあるが、本校で感じることは、生徒の物事に対する考え方が甘すぎる。これは、勉強、クラブ活動等に如実に現れている。「何事も最後までやり通すことができない、我慢すること、耐えること、頑張りぬくこと、それができずに最後には切れてしまう。精神力の甘さが目立つ。」そのような生徒たちをどう指導したらいいのか。最近指導の中で感じることは、昔のように頭ごなしに指導することはできない。そうすると生徒は反発するか、殻にこもってしまう。まず、「生徒から話を聞く。」という、こちらが一步引く感じになってしまうが、そのぐらいの余裕のある指導が必要と考える。



これからの時代、もっと多様な環境の家庭、生徒が増えてくる。言うまでもなく未然に問題行動を防げることが望ましいが、そのためには、毎日の生徒状況の把握、家庭との連携を欠かさず、小さな事を見逃さず徹底して行うことが大切と考える。また、教員の共通理解が不可欠であり、風通しのよく足並みの揃った指導が生徒の心に通じる生徒指導と考える。

< 具体的活動の成果と課題 >

(1) 頭髪指導

毎月全校集会時に頭髪・服装点検を行っている。担任、副担任の点検の後、学年主任生徒指導部と指導にあたる。違反者には保護者の協力と理解を求め、帰宅再登校も行っている。意識の低い生徒の指導が課題であり、継続指導が必要である。

(2) 服装指導

校内での違反はほとんどないが、だらしない制服の着こなしがある。そのため、毎

日の校門での服装点検を欠かさず行い、ホームルームでの点検、授業開始時の点検を行い、身だしなみをきっちりさせてからの授業にしている。ただ、学校を離れてからの服装等に不安がある。「学生服をなぜ正しく着ることが大切なのか。」の意味を徹底させることが大切である。

(3) 挨拶・言葉遣いの指導

教員自ら率先し校内外あらゆるところで指導している。ほとんどの生徒が挨拶をするがなかなか生徒自らが大きな声で挨拶するまでに至っていない。この指導は継続することにより必ず効果は上がると確信する。

(4) 校門指導・校内巡視

校門指導は毎日輪番制で行っている。主に頭髪・服装指導及び遅刻指導を行い、遅刻はほとんどない。また、校内巡視は各先生の授業の前後に教室廊下等の巡視をしてもらい昼食時には担当場所、時間を決めて行っている。この昼食時の巡視は生徒とのコミュニケーションをとることに有効に使われている。

(5) ホームルーム活動

ホームルームを基盤としての指導を展開し、生徒会活動の有機的な連携と活性化を図り、集団と個との関わりを正しく認識させ、調和のとれた学校生活を営む態度を養うことを目標としている。

(6) 安全教育

自転車通学の生徒は乗り方の指導、自転車点検、特に冬場の自転車通学生には反射タスキを購入させている。

原付バイクについては許可制で取得を認めている。全校生徒による原付バイクの講習会では、実際に乗車指導を警察の方から受け免許取得者全員に乗車指導をするが、かなり危ない運転をする生徒もあり、運転に際して注意を呼びかけるとともに、必要以外乗らせない指導が必要になる。

2 成果及び課題

基本的な生活習慣の徹底を土台に教員自ら率先してあらゆるところで指導をしている。特に問題が生じるのは頭髪服装においてです。ほとんど違反はないが長期の休業後に違反者が数名出てしまう。本人の意識の低さを感じると共に保護者の子供に対する甘さもあるように思う。このようなところが学校と家庭の連携の難しさでもあると思う。また、校門指導、校内巡視も全職員により毎日行うが、このような指導をしなくてもいいような学校、また、社会に対する意識の高い生徒を育てたい。

本校はやっと3学年が揃い、学校づくりの土台ができた。ただ、これからが本当の意味で本校が問われる時を迎える。これから卒業後、社会人として認められる人間になるには、この在学中に「物事の善し悪しの分別をきっちりつけられること。人の心をわかる人。社会のマナーを守れること。」など、内面に迫る教育が必要となる。本校は、まだまだ学校づくりの最中です。手を抜くことなく日々生徒と共に励んでいきたいと思う。

3 その他参考となる事項

奈良県立青翔高等学校ホームページ <http://www.nara-seisho.jp/>

「英語コースの充実」と「国際理解教育の推進」

奈良県立桜井高等学校 教諭 竹中 三郎

1 実践内容

(1) はじめに

本校は平成7年度に、桜井高等学校の「特色ある学校づくり」の一つとして英語コースが開設され、今年で12年目を迎えています。平成16年度は本校創立百周年にあたり、これを契機に英語コースの充実を図るべく、コミュニケーション能力の育成や大学との連携、国際理解教育など、いろいろな活動を実施しています。



(2) 具体的実践

ア コミュニケーション能力の育成について

コミュニケーション能力を高めるとともに大学入試対策も視野に入れ、各種英語検定試験を受験しています。文部科学省認定の実用英語技能検定試験については、卒業までに2級合格を目指した個人指導を行っています。その結果、最近2級の合格者も増加しています。また奈良県の高等学校では初めての試みとして、TOEIC Bridge IP テストを1・2年生の「英語コース」生徒を中心に11月に団体受験します。

また、本校英語コースの独自科目である「英語理解」「英会話」の中で、ALT（語学指導助手）の協力を得て、少人数制でチームティーチングの形式で身近な場面を想定し、英語を用いて授業を展開しています。その一つとして、本年も昨年に引き続いて、1学期に2年の英語コースで、外国人に日本の文化を理解してもらうという立場で茶道のお点前を外国人指導助手と共に実習しました。



茶道体験（英会話）

また、今年度入学した1学年英語コース合格者30人に対して、実用英語技能検定試験及びTOEIC Bridge IP テストを視野において、コンピュータ室を利用したリスニング力養成も行っています。

イ 高大連携について

平成16年度より、奈良教育大学、天理大学、関西外国語大学、関西学院大学などとの連携を図り、出張講義を通して大学での授業を体験させ、英語への関心・意欲を高め、国際理解の基礎を体得させようと計画し実行しています。

ウ 幅広い分野への進学について

新しい英語コースの在り方として、カリキュラムの見直しを行い、数学の選択を設けて幅広い学習ができるようになりました。そして、コミュニケーションの力をつけるとともに外国の様々な事柄に興味・関心を持つことにより、国際的に視野の広い人間性を養い、様々な分野に進出し、国際的な舞台で活躍できる人材を育成することにしました。

エ 留学生との交流会について

本校では、数年前からYFUの留学生を受け入れています。1年間、2学年の英語コースに在籍し、一緒に学習活動を行い、クラブ活動でも交流し、生徒の国際理解教育に役立てています。今年はスウェーデンから女子生徒一人が来校し、11月には英語コースの1・2年生の生徒の中から約50名が中心になって、交流会を実施する予定です。



留学生との交流会

オ その他の海外との交流について

毎年6月の末から7月にかけて短期留学生を受け入れ、英語コースの生徒と生活を共にして、日本文化を吸収し、帰国しています。本年度は、アメリカ合衆国の女子生徒を受け入れました。生徒達はYFUの留学生との交流と同様に、いろいろなことを学んでいます。

カ その他

これ以外に、将来的なビジョンとして、姉妹校の提携、交換留学、海外短期研修も視野に入れていきます。また、外部よりいろいろな分野から外国人を招聘し、特別講座も開く予定です。

2 成果及び課題

英語教育の目標は、技能としての英語を習得させると同時に、「言語に対する関心を深め」「国際理解の基礎を得させること」にあると思います。本校も少しずつではありますが、活動の成果が出てきています。英語コース3年女子生徒の中には、市内の英語通訳ボランティアで活動し始めた者もいます。これからの課題としては、国際社会に通用する人間育成のための英語教育が肝要であり、そのための方策を考えていかなければならないと思っています。

3 その他参考となる事項

平成2・3年度の2年間、県立桜井商業高等学校で文部省（現文部科学省）・奈良県教育委員会指定で「チーム・ティーチング研究推進校」としての研究を、校長の弓場康先生の指導で、学校全体の協力のもと行なえる機会を得ました。この時の研究で、私自身の中に国際理解教育の礎ができあがったと思います。そのお陰で、現在まで英語教育、国際理解教育を中心に、ALT（語学指導助手）、交換留学生のお世話を前任校である郡山高等学校と桜井高等学校で続けてこられたと思います。

1 実践内容

私たちは、いろいろな感覚器官を通して環境から様々な情報を取り入れている。中でも視覚情報は大変重要で、『人は感覚の80%以上を視覚から得ている』とさえ言われている。近年、TEACCH プログラムの普及により、自閉症児に対する視覚支援の大切さが認識されるようになってきている。また拡大代替コミュニケーション(AAC)の考え方を取り入れ、写真・絵・シンボルなどを用いた技法も広まってきている。そこで、学級や学習場面において、自閉症児だけでなく、児童一人一人にとってより正確でわかりやすい視覚支援を目指しながら、個の課題に迫っていくようにさまざまな取り組みを行った。



(1) 時間の視覚的構造化

時間割の提示(一日の予定がわかるように縦にカードを並べて張る。学級用と個人用)

曜日の提示(一週間の予定、カードを横に並べて張る。昨日・今日・明日の明示)

1か月の予定の提示(手作りカレンダーを作成する。余白に行事などの予定を記入)

タイマーの活用(視覚的に時間経過が示されるタイマー・キッチンタイマーの併用)

- 成果として以下の点が挙げられる。
- ・こだわりが強く環境への不適応行動が目立った児童が、場面の切り替えがスムーズにできるようになり、安心して学校生活が送れるようになった。
 - ・睡眠障害があり、休日に生活リズムが崩れていた児童が、曜日感覚が身につき、睡眠障害が改善し休日も安定して過ごせるようになった。
 - ・予定変更などでパニックになっていた児童が、事前に説明を聞き、いろいろなケースを予測することができるようになり、気持ちを調整できるようになった。
 - ・マイペースの児童がタイマーを使った指導で時間を意識するようになり、周りの友達への意識が高まったり場面に応じた行動の切り替えがスムーズになったりした。



(2) コミュニケーションの充実

『おはなしブック』の作成(人物 家族・教師・友達、生活用品、趣味・余暇活動に関するもの、場所 部屋・店など の写真を整理して一覧にする。)

絵カード・文字カード・シンボルを使った指導(「ことば」の授業でカードを使って指導する。カードを操作しながら思考することができた。)

生活場面での写真カードやデジタルカメラの使用(生活場面で音声言語と視覚刺激(絵・写真・カメラの液晶部分)を結びつけることで言語の定着を図る。)

カードを使った構文指導(複数のカードを並べることで、2語文・3語文的表現や

主語 - 述語を意識した文の表現を指導する。)を行った。

成果として以下の点が挙げられる。

- ・自分の要求を一方向的に伝えるだけであった児童が、「いつ」「どこ」「だれ」などの質問の意味が理解できるようになり、写真を指さして思いを伝える中で、双方向のコミュニケーションが成立するようになった。
- ・言語不明瞭の児童がジェスチャーやことばと併用して補助的にカードを使うことで、より複雑な内容のコミュニケーションがとれるようになり、自発性や意欲が向上した。
- ・絵に表しにくい概念（形容詞や心情を表すことばなど）をシンボルを使うことで、言語理解が進み、そのことが自己意識や他者理解にもつながった、などである。



2 成果と課題

(1) 成果

視覚支援は音声言語のように消えることがなく、作業記憶(ワーキングメモリ)の容量が少ない児童にも理解しやすい。多くの情報、高度で複雑な情報も丁寧に伝えていくことができる。また自閉症児など見通しがもてないことへの不安傾向が強い児童には、見通しをもつことで、情緒の安定や自己調整力を培うことにつながる。

視覚支援は目に見えない時間やことばの概念を視覚化することができるので、言語発達に遅れがある児童、例えばことばと事物の名称が結びついていない児童、ことばからその意味する事柄をイメージをすることが苦手な児童に対して、大変わかりやすい。また工夫次第で正しい意味やイメージを伝えることができる。

視覚支援は2者間でその視覚刺激を共有することにつながるので、コミュニケーション活動である。児童一人一人の認知レベルに合わせて内容を工夫できるので、双方向のやりとりとして充実し、コミュニケーション意欲が育っていく。

(2) 課題

国際生活機能分類(ICF)では、障害を個人因子と環境因子の両面から捉えている。視覚支援は環境因子に相当するが、個人因子とも密接に関連し、両者のバランスを考えることはとても大切である。このことは『自己のもつ能力や可能性を最大限に伸ばし、自立し、社会参加をするための基盤となる「生きる力」を培う』(「自立活動学習指導要領解説」より)という自立活動の内容と大いに関係する。一方向的に視覚支援するのではなく、その支援を通してどのような力を獲得していくのかという個別課題との関連を十分に検討したものになるよう努力していきたい。また、視覚支援は誰にでも有効であることには違いはないが、定型発達児と自閉症児のそれぞれの認知特性を十分に理解した上で、視覚支援をさらに有効に使ってきたい。

3 その他参考となる事項

- ・視覚的に時間経過が示されるタイマー(TimeTimer)NPO 法人えじそんくらぶで購入可
- ・『自閉症の人たちを支援するということ』朝日新聞厚生文化事業団
- ・『自閉症のひとたちへの援助システム』朝日新聞厚生文化事業団

1 実践内容

生徒の健康課題の深刻化に伴い、保健室においては心身の不調を訴えて訪れる生徒が増加している。訴えは頭痛・腹痛等であっても、内面では心の問題をかかえ、意識的にまた無意識のうちに周りの人たちにいろいろなサインを送っている場合も少なくない。生徒が発するそのような SOS サインを見逃さず、必要な情報をいち早く関係者に提供し、学校内外の様々な立場の人たちと共通理解を深め、それぞれの役割を担いながら連携してかかわることができるよう日々取り組んでいる。



北和女子高等学校（専門学科を有する女子高等学校における養護教諭の役割）

平成10年度の保健室の様子 < 15年間勤務 >

来室者 約1200人（多い日25人）日本スポーツ振興センター給付件数約20件
「何回も来室する」「客観的異常（体温・脈拍・顔色など）がないのに来室する」「すぐに帰宅したがる」「不自然なけががある」等の場合は、慎重に観察し健康相談活動を積極的に行った。まず、食生活の乱れから不調を訴えて来室する生徒には、コンピュータを活用した食事診断を行い、数年後には家庭を持ち、子どもを産み育てることを考え、『食』について自分で判断し、選択できる生徒の育成を目指した。一方、家庭事情が複雑で『心の居場所』としての機能を失っている場合や相談内容によっては、多くの時間をかけて深くかかわった。特に『性』に関する相談では、女子生徒であるがゆえに犯罪被害的なケースも見られ、生徒指導部との連携はもちろん、養護教諭が警察署や青少年サポートセンターと直接やりとりするという場面も少なくなかった。また、リストカットがエスカレートしたケースでは、担任・保護者・主治医と常に連携を取り合いながら症状の回復を見守った。

平城高等学校（大規模普通科高等学校における養護教諭の役割）

平成17年度の保健室の様子 < 4年目の勤務 >

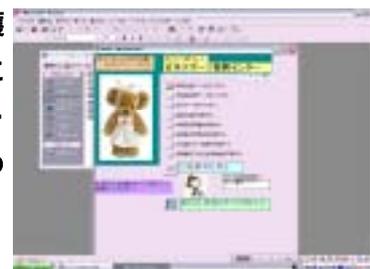
来室者 2504人（多い日62人）

日本スポーツ振興センター給付件数360件（奈良県高等学校平均給付件数96件）

この状況下で、1人の養護教諭が生徒一人一人の訴えから、SOSのサインをキャッチし積極的に健康相談活動を進めていくのは、時間的にもきわめて困難である。

(1) パソコンをフル活用する。

来室者・健康診断等の管理には、奈良県高等学校等養護研究会で開発された保健管理ソフト『くらく』を本校用に加工したものを活用し、また、日本スポーツ振興センターには、平成17年度からオンライン化された申請方法に合わせ、独自で開発したものをそれぞれ利用することにより、生徒との対応時間を確保している。



(2) 保健室来室カードを使用する。

平成17年度に、本校独自の保健室来室カードを作り、生徒自身はもちろん、担任・教科担任にも、生徒のその時点での保健室来室状況が一目でわかるようにした。これによって、保健室情報が時機を逸することなく、担任等に提供できるようになった。

平成18年度には、このカードにさらに改良を加え、担任・学年主任・保護者の感想等を書いていただく欄を設け、生徒と必然的にかかわっていただく機会を作るようにした。その際、カードの要所に『保健室からのワンポイントアドバイス』を記入することにより、このカードが遅刻カードのイメージを与え、「保健室の利用が多いのはよくないことだ」というような印象を与えないように配慮した。また、生徒のプライバシー保護という視点から、このカードには病気を詳細に記載する欄を設けていないが、保健室では生徒の主訴に対して、主訴別に問診票を考案し、まず器質的な疾病の見落としがないかを確認後、生徒の「心の悩み」の部分に触れ、必要に応じて詳細を担当に情報提供するように心掛けている。

(3) 効率的な定期健康診断を考える。

新学期、1年生は新しい学校、2・3年生は新しい学級となり、人間関係等の戸惑いから心身のバランスを崩し、体調不良を訴えて保健室に来る生徒が多い。しかし、この時期、保健室は検診のため養護教諭不在となっていることが多く、必要な対応をすることができない。そんな状態をできるだけ減らすよう、検診を組み合わせたりする等して、健康診断を短時間でかつ有効に実施できるよう工夫している。

2 成果及び課題

どちらの学校においても、養護教諭の職務の特質や保健室の機能を十分に生かした保健室経営ができないかと常に考え、取組を進めてきた。

まず北和女子高等学校では、コンピュータを活用した保健指導を展開した。自分が摂取した食事内容を、科学的かつ迅速に分析することができることから、生徒たちは興味と意欲を持って積極的に診断を希望したので、指導効果が大きかった。家庭事情が複雑で保護者の協力が得られない生徒のケースは、支援がとても難しかったが、校内外の関係機関と連携をとり、それぞれの進路実現に向けて支援できたことは本当によかったと思っている。しかし『性』に関する部分では、女子高校である特質も踏まえ、生徒の心に訴える指導と安全教育のさらなる取組が必要であったと反省している。

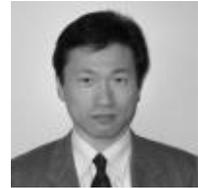
平城高等学校では、膨大な事務処理と保健室に次々と訪れる生徒の対応に追われ、一人一人に十分かわる時間が取れないため、保健室来室カードを工夫し、関係者へのすばやい情報提供を試みた。このことでは前年度末、一人の生徒の利用が続いた際、いち早い対応で問題解決へとつなげることができた。

また健康診断では、実施方法を工夫することにより、検診に費やす時間をかなり短縮でき、新学期で気持ちの不安定な生徒のために保健室を提供することができた。これについては学校医の指導助言のもと、健康診断の意義を損なうことなく、効率的に進めていくことができるよう今後も取り組んでいきたいと考えている。

3 その他参考となる事項

奈良県立平城高等学校ホームページ <http://www.heijo-hs.ed.jp>

1 実践内容



- 1993 実習棟新築・本館南館改築に伴い、時代に先駆け校内 LAN の導入を計画。
- 1994 10BASE5 4セグメント総距離2Km の校内 LAN 導入。
- 1995 情報処理・CAD 各教室に小型のサーバを設置し、NetWare にて使用。Windows95の登場を受け、全教職員に LAN 環境に慣れていただくために進路指導室内に古い PC を利用して、小規模のファイルサーバを設置。
- 1997 落成記念事業として Web Page を設置すべく、プロバイダと『端末型ダイヤルアップ IP 接続サービス』で契約。
『情報活用委員会』発足。
- 1998 Web Page を開設・公開開始。
Proxy Server ソフトを導入し、進路指導室内のファイルサーバに繋がったモデムを共有化。校内 LAN に接続されている全ての PC からインターネット接続が可能となる。
- 1999 FAX 回線を ISDN 化することにより 2 回線を確保し、ダイヤルアップルータを使用してのインターネット接続開始。
コスト削減のため『I・School プラン』適用。
- 2000 進路閲覧室にて生徒によるインターネット閲覧開始。
ウイルス対策のためサーバ側にウイルス対策ソフト導入。
- 2001 生徒・教職員が協力して全普通教室に CAT5E のケーブル敷設。全普通教室に無線 LAN のアクセスポイントを設置し、インターネット接続開始。PC は各クラスの学級費から捻出。
『フレッツ・ISDN』 『フレッツアイプラン』 『フレッツ ADSL プラン』とコスト・速度・使用状況を勘案し順次変更。
『次世代 IT を活用した未来型教育研究開発事業』により、テレビ会議システム一式が総合 PC 室に納品・設置される。
- 2002 総合コンピュータ室整備。
10BASE5の使用を停止し、メイン：GIGA/SX 末端：100BASE-TX を基本とした LAN に移行。本格的なサーバを導入し、生徒・教職員がサーバにログインしてから PC を使用する環境に完全移行。就職後のことを考え、学校用の特殊なシステムは導入せず、ごく一般的なものにする。
『フレッツ・ADSL 8M プラン タイプ 2』による接続開始。
- 2003 校内電子掲示板システム導入。
- 2004 『総合 IT 部』発足。
CAD 室整備。就職後のことも考え、AutoCAD を導入。
この間、各 PC のトラブル発生時には迅速に対応し、メンテナンスを行う。

『PC・LAN はあくまで手段であり，それらを使用することが目的ではない』を肝に銘じ，次世代の IT 社会に適應できる人材を育成すべく、生徒・教職員、一人ひとりが能力を十分に発揮し、自己実現を可能とするための「機会」「場」を IT を通して、積極的に提供し、全員のスキルアップをはかることを目標とし，IT に関する教育環境・職場環境を提案・創造・保守・点検・整備を進めている。

2 成果および 課題

成果：規模に於いては県内企業に引けを取らないネットワーク環境となった。世間に先駆けてパソコン製作講習会を開くなどの様々な工夫をすることにより，自由に使用可能なコンピュータの台数を増やし、各生徒教室にまで行き渡らせた。そのため，教師がコンピュータを外部から持ち込む必要が無くなり、このことはセキュリティの面からも非常に効果的であった。また，全てのコンピュータとプリンタがネットワークに接続され，全校で OS・ソフトウェア・フォント等を統一し，データはサーバ上に保管しているため，各種メディアでファイルや環境を持ち歩くことなく，どの部屋のどのコンピュータからも同じ環境で仕事が可能となり，データの整合性も取れ，散逸の可能性も低くなり，仕事の効率を上げることができた。

一方，他校とは異なり，インターネットの使用に関しフィルタリングソフト以外規制を一切かけていないため，効率的にいつでも，どこでも教材研究が可能な点も評価されている。授業に於いても，環境が統一されているため，実習室を移動しても同じ環境で授業が可能となり，生徒も違和感なく効率的に授業で利用出来るようになっていく点も大きな特徴と言える。

生徒たちが卒業後，会社でコンピュータやネットワークを使用することを前提に校内全体を構築してきているため，コンピュータやネットワークを目の前にしたときのハードルが低くなり，生徒たちが就職後もスムーズに会社のコンピュータ・ネットワーク環境に順應できるようになっている。このことは，キャリア教育の視点から見ても，効果があったと思われる。この様な PC 環境を構築できたため、本校では早くよりコンピュータをネットワーク上で使用し，ファイルを共有するのが『あたりまえ』になっていて，逆に，今までのようにコンピュータをスタンドアロンで使用したり，使用中の端末自身のメディアに保存することに違和感を感じるようになっていく。便利さがあたりまえになったことが一番の成果であると考えている。

課題：学校現場の時限と一般の時分という 2 つの時間軸に対応したグループウェア（市販されていない模様）の導入、及び各種データ整理のためのデータベースの本格的導入が必要である。また今後，更なる発展のために，メンテナンスを行うことの出来る人材の育成が急務であるとする。

3 その他参考となる事項

Web Pag：日経 BP

<http://itpro.nikkeibp.co.jp/network/index.html>

雑誌：日経 NETWORK

<http://bpstore.nikkeibp.co.jp/mag/nnw.html>

1 実践内容

私は高校野球の監督として、前任の斑鳩高校では15年間（常勤講師2年を含む）指導し、現任の登美ヶ丘高校では今年で10年目を迎えた。斑鳩高校では赴任当初、選手の有名強豪校へのコンプレックスが強く、そのことが服装や生活の乱れ、またマナーの悪さなど、エネルギーが違った方向に使われていることを強く感じた。そのため、何事に対しても積極的かつ素直に真剣に取り組み、自分自身に自信を持つという意識改革を中心に指導を行い、天理・智弁・郡山などの強豪校に選手と共に必死に勝負を挑んだ15年間であった。



登美ヶ丘高校に赴任した頃、選手たちに接して、総じてまじめでおとなしく、「夢」や「目標」もなく、ただなんとなく高校野球をしているという自己満足的なクラブ活動をしているように感じた。現在までの10年間では、自分の可能性に自分自身が「夢と希望を持つこと」、「夢は実現できるもの、させるもの」、「人間力を高めること」、この3つに重点を置きクラブ指導を行ってきた。

具体的な指導

学校生活への積極的参加

生徒会各種委員への立候補、また、クラス活動や文化祭・予餞会などでの司会、コント等、体育行事での準備・審判、清掃活動・ボランティア活動などへの積極的参加を通じて、「照れくさい」「恥ずかしい」という意識を取り除き、何事にも積極的に取り組む姿勢を身につけさせる。そして、クラスや学校の核・リーダーとなり、自分自身の存在感を実感させ自信を持たせる。

3分間スピーチ

毎日、各学年1名ずつが「今、自分が感じていること。今、自分が頑張ろうとしていること」を部員の前で話すことで、自己表現力を高め、言葉に責任を持たせる。そして自分自身が見えていなかった自分自身の姿に気づかせる。また、聞く力を身につけ、仲間理解につなげさせる。

感謝の言葉

「両親にありがとう。みんなにありがとう。野球にありがとう。」と、練習の最後に部員全員で大声で唱える。毎日感謝の言葉を唱えることにより、日常生活の中で「ありがとう」「ありがとうございます」が自然に言えるような、感謝の心を身につけさせる。

夢の実現

甲子園という夢に向かって、「夢は実現できるもの、させるもの」を常に意識させ、ドラマ作りのできるチームを目指させる。「～たら」を使わない。常に「～する」と

いうように断言させる。

自己選択

3年時5月に、今後何によってチームに貢献するのか。以下の中から選択させ、自己理解を深めさせるとともに、現実の自分を受け入れる力をつけさせる。(e、f、gを選択することは、実質現役引退で裏方にまわる事になる。)

a：レギュラー b：守備要員 c：代打要員 d：代走要員 e：ランナーコーチ
f：ムードメーカー g：選手コーチ(ノッカー)

「夢」の切り替え

毎年度夏の大会の全試合が終わった翌日、3年全員の個人面接を行い、進路実現に向けて「夢」を切り替えさせる。そのとき、ツーランク以上の目標を持たせるように心掛けている。

2 成果及び課題

(1) 成果

2年、3年と上級生になるにつれ、部員たちはクラスや学校の中心になり、教職員にかわいがられ、また、クラスでも頼りにされ、自分の存在感を実感し、自信に満ちた学校生活を送ってくれている。また、進学に関しても、大阪府大、大阪市大、奈良教育大、慶応、関関同立など、ほとんどの部員が第一希望校に合格し「夢の実現」を果たしている。

クラブ実績としては、いまだ甲子園には出場できていないが、H12年夏の大会ベスト4、H13年春季大会準優勝(郡山に勝利)、H14年秋季大会3位(選抜野球大会21世紀枠県代表)、H15年春季大会3位、H16年春季大会優勝(智弁に勝利)、H18年春季大会3位(天理に勝利)、H18年秋季大会4位など、「夢の実現」まであと一步のところまで来ている。指導者として25



年間、部員とともに「夢の実現」に向かっていく中で、多くのことに気づき、また学ばせてもらい、私自身が人として、教員として、指導者として、大きく成長させてもらったことに心から感謝したい。

(2) 課題

部員たちは素直で透明な心を持つ存在であり、その可能性は無限大である。自分の可能性に夢と希望を持たせ、「夢の実現」のためには、部員たちがどのような色に染まっていくのか、またどのような可能性を引き出しかけているのか。そのために今何から指導してやらなければならないのか。それにはまず、私自身の部員たちを見る力、受け止める力、心のキャッチボールができる人間力、これらを磨いていくことが最大の課題であると私は信じている。

3 その他参考となる事項

登美ヶ丘高等学校ホームページ

<http://www.nar-tomigaoka-h.ed.jp/>

事例番号37 高等学校 部活動の部

音楽を通して地域に貢献できる生徒の育成 - たくさんの本番が生徒たちを成長させる -

奈良県立片桐高等学校 教諭 川北 秀樹

1 実践内容

私は、平成9年4月に片桐高校に赴任しました。吹奏楽部顧問に委嘱され、まず部員たちに言ったのは、「今の1年生が卒業するまでに自分たちの演奏会をしないか。」ということでした。演奏の機会を増やすことから始めようとしたのですが、1年目は、部員は他校との合同演奏を拒んだり、他校の演奏会から学ぶという姿勢をなかなか出せない状態で顧問の私と部員の水が深まるばかりでした。



しかし、赴任2年目の秋頃から、1年生が私の考え方に共感をもつようになり、高等学校文化連盟や吹奏楽連盟の行事に積極的に参加するようになりました。私自身の大学時代の経験から沖縄の離島で訪問演奏をしたときに得た地元の方々が喜んでいる光景を思い出して、まずは地域に根ざす活動を通して音楽の素晴らしさを説いたことで、赴任



3年目、平成12年3月には演奏・運営・企画など未熟でしたが、小さいながらも部員たちの手で初めて地域の公民館での定期演奏会を実施できるまでになりました。「舞台人として最後は舞台上で卒部させてあげたい。」と私自身思っていましたので、これから毎年3月にこの定期演奏会を続けたことは意義深かったと思います。この演奏会を支えた部員たちが、平成12年の第42回奈

良県吹奏楽コンクールで金賞を受賞することになります。

この年以降、運営面と演奏面で次のように部活動を動かしました。

まず、運営面では部長・副部長と顧問が、部活動の企画・運営方針を一緒に決めていく体制（サミット会議）を採用しました。この形にしたことで、サミット（部員代表）が顧問の考え方と部員たちすべての考え方を受けとめ、これから行っていく行事についての案を作り上げ、これをみんなで考え実行する形になりました。

他にも各々の行事では必ず、サミットでない部員が企画・運営を立案させる実行委員会をつくり、全員がサミットと同じモチベーションを持たせようとした。同じ曲を演奏する機会でも必ず司会者や曲のカットの部分を変えたり、決して同じ発想でないように考えさせました。どんな小さな地域の演奏会でもアンコールがかかることの嬉しさは本当に計り知れないもので、拍手が部員たちを大きくしてくれるからです。

また、一人ひとりの個々の課題を認識させるために、パートごとに輪番制で書いていたものを個人ノートとして、部員自身の課題や吹奏楽部の課題などを毎日欠かさず書かせました。このノートは顧問としてもとても役立ちました。会議や出張等で部活動に行けないときにこのノートは一人ひとりが置かれている状態がよく把握できました。

演奏面では、できるだけ部員たちに身近な日本人作曲家の曲を多くとりあげることから始めました。吹奏楽の世界ではどうしても外国の作曲家の曲をとりあげるケースが多く、作曲家が身近な存在ではありません。演奏していてもその作曲家がどのようなシュ

チュエーションで曲を創ったのかを直接お伺いすることもできないですが、日本人の作曲家（邦人作曲家）ならそれが可能になると考え、本校のために吹奏楽曲を3人の作曲家に創っていただきました。私が予想したとおり、部員たちの目は輝き、どうしてこの和音はこうなっているのかなどを自分で考え、自ら作曲家に手紙やメールを送ったりして質問したり調べるようになりました。

このような状況の中、気持ちの「気」と「LOVE」の愛と書いて「気愛」を部のモットーとし、自分達の音楽で、夢、元気、勇気、感動を発信していくことが、喜びであると部員たち自ら思えるようになりました。その結果、県関係の演奏依頼も増え、平成15年第45回奈良県吹奏楽コンクールで金賞を受賞し、初めて奈良県代表として第53回関西吹奏楽コンクール高校小編成の部に出場でき優秀賞を受賞することができました。

しかしながら、平成15年6月、県立高校再編統合計画が発表され、年度ごとに部員数が減少する中、意気消沈する部員に私は「吹奏楽部の先輩たちが築きあげてきた伝統の上に立って、最後まで意欲を失わないで頑張り、伝統と校風を一層高め、法隆寺国際高校に引き継ごう」と励まし、指導してきました。平成17年には、第29回全国高等学校総合文化祭青森大会吹奏楽部門に奈良県代表として参加することができ、参加団体中全国で一番人数が少ない21名の演奏で、観客と一体化する演奏を披露し好評を博しました。このよき伝統を法隆寺国際高校に繋ぐために平成18年3月に合同定期演奏会を開催しました。片桐高校としての最後の年には、片桐高校の校歌をモチーフとして取り入れて



作曲していただいた曲をあらゆる出番で演奏しました。その結果、平成18年8月には第48回奈良県吹奏楽コンクール金賞を受賞し、2回目の奈良県代表にも選出され第56回関西吹奏楽コンクール高校小編成の部では優秀賞ときらめき賞（審査員特別賞）を受賞し、さらに第12回日本管楽合奏コンテスト全国大会（写真 株式会社フォトライフ）では最優秀賞をいただきました。

2 成果及び課題

平成12年から毎年開催している定期演奏会、例年の保育園、福祉作業所、老人ホーム訪問演奏で子どもたちや入所者の喜ぶ姿、御参加いただいた多くの地域の方々の涙を見たときは、夢、元気、勇気、感動を与えられたと実感しました。本校で10年間吹奏楽部の指導を通して、生徒に企画力、表現力、忍耐力、判断力、協調性、責任感を身に付けさせようと努力してきました。これまで御指導・御支援いただいている人たちに感謝をしながら、片桐高校最後の吹奏楽部員13名に音楽のもつ素晴らしさ、楽しさ、ひたむきに音楽と向き合うことを再確認させ、生徒一人ひとりをソリストとして輝かせ、地域に向けた気愛のオンステージを最後まで頑張らせ、たくさんの卒部生も1つになって片桐高校吹奏楽部のよき伝統を法隆寺国際高校吹奏楽部に引き継ぐことが、私の課題であると思います。

3 その他参考になる事項

奈良県立片桐高等学校ホームページ <http://www.katagiri-shs.ed.jp>

事例番号38 高等学校 学校教育推進の部

教師・生徒・保護者 三位一体となった教育活動 ～高等学校再編統合のなかで～

奈良県立片桐高等学校 教諭 増田 全敏

1 実践内容

私は、平成15年4月現任校に赴任した。すぐに、総務部長を任命され、主に学校行事、育友会、同窓会の仕事に携わることとなった。その年の6月、県から県立高校の再編統合計画が発表され、立場上私はワーキンググループの一員となり、以後これまでの3年半、私は本校で生徒、保護者、統合校や外部団体といろいろな立場で繋がっていくこととなる。



1年目（総務部長として）

赴任早々、5月に育友会総会、同窓会総会、6月に桐栄会（学校後援会）総会と続き、本校教育が様々な団体に支えられていることを肌で感じ、その時県からは高等学校再編統合計画が発表される。すぐに、片桐、斑鳩両校でワーキンググループが発足し、新しい学校づくりと閉校に向けての作業を進めて行かねばならない状況となった。県教委からの説明を受けた後、国際科、教育課程の制定、制服等の検討に入ったが、たった1年半で物心両面の準備ができるものなのだろうか、不安なままのスタートであった。当時私が常に留意していたことは、この再編に向けての両校教師や保護者、卒業生の意識がどのようなものであるかである。ワーキンググループ内だけでなく、各種団体と校内外で話し合いを頻繁に行った。8月の高等学校PTAの全国大会では、県内様々な学校の育友会役員の方々の意見を聞いた。校名や制服の有無など、教職員にアンケートを実施し、それぞれの教師の教育観や生徒指導に関する意識に触れさせていただいた。また、制服展示会などに赴き、スクールイメージや学校の特色について真剣に考えた。両校の現状を客観的に捉え、これから入学してくる生徒にとっていかに魅力ある学校づくりをしていくか、青写真を頭の中で描きながら2年目を迎えることとなった。

2年目（3年学年主任として）

校内人事の関係から、3年の学年主任を任命された。ワーキンググループの仕事は継続しながら、今度はより一層生徒や保護者に近い立場に立つこととなった。生徒の進路変更、授業料の延滞、特別指導等で、生徒のみならず保護者と話すなかで、あらためて苦しい立場に置かれた家庭の多いことに驚かされた。ある母子家庭の生徒は、親子関係の亀裂から1年の大半の期間を親元を離れ、姉の下から本校まで通学した。片道3時間近い通学であることにめげずに登校し、卒業式に母親、姉と本人の三人であいさつに来られた時は、目頭が熱くなった。また、進路指導で大学や家庭訪問に行くこともあったが、その中で大学が生徒にどのような力を求めているか、保護者が教師にどのような指導を願っているか、大いに感じ取ることができた。一方、ワーキンググループの方は、苦労した統合校の校名も決定し、具体的な詰め作業に入っていた。制服に関しては、制服業者への説明会、制服業者のプレゼン、学校での展示会等を経て、新校のイメージに合いかつ生徒指導の十分可能なものを作り出すことができた。素材や着心地にもこだわったため、運動部の生徒や女性の先生にも試着してもらい、生徒と教師の両方からの支持が得られるものができるようになったと自負している。新校設立の主だったものは整ったため、

ワーキンググループとしての作業は、その年の暮れには終わりを迎えた。

3年目（生徒指導部長として）

この年から本校の人事異動は本格的なものとなった。今後2年間、毎年約3分の1ずつの教師が転動していく。私は、生徒指導部長を委嘱された。その時、私が最も懸念したことは、来年度最後の学年となる2年生の動向である。再編統合の発表後の入試で入学してきた生徒達で、どうしても留年はしないだろうという甘えが心の奥底に見え隠れしたためだ。案の定、6月以降特別指導の件数は増え、家庭や警察署へ奔走する毎日となったが、このままでは本校の最後が生徒にとっても学校にとっても苦いものになってしまう。私は、分掌の先生方と協力して、全校集会や特別指導の席で生徒達に、最後の2年間を自分たちにとって心に残るものにしていくか、また感謝の気持ちをどのようにして周りの人たちに伝えていくかを訴え続けた。このことには、全職員が気持ちを一つにして臨むことができた。校内には、閉校準備の一環として記念事業準備委員会等を立ち上げ、生徒達の心に片桐という校名がいつまでも残るような事業を推進した。また、教育活動や部活動が新校にうまく引き継がれていくよう各部署で取り組みを行った。

4年目（野球部監督として）

野球部前監督が転動したため、4月よりその任に就いた。チームの基礎は前監督が十分に鍛えてくれていたため、私の役目はそれを引き継ぎ、その成果を選手達にいかに出させるかということだった。前監督と私の想いは、3年生だけの片桐単独チームでもこれまで同様戦えることを選手達に味わわせてやりたいということだった。前年7月の新チーム発足以来、生徒達は例年の倍以上かかる練習の準備や後片づけを含めて、本当によく頑張った。また、例年以上に増して野球部OBや保護者会の協力をいただき、学校そして野球部に寄せる想いを痛いぐらい感じた。期待と不安のなかで臨んだ本年度の選手権奈良大会では、1回戦を勝利し、校歌斉唱で見せた選手達の涙は、これまでご支援ご声援くださった数々の方々にその想いを伝えることができたのではないかと思う。



写真提供 奈良新聞社

2 成果及び課題

監督として臨んだ高校野球奈良大会で、試合後見上げた応援席で法隆寺国際高校の制服を着た1年生が、私と選手達に向かって拍手を送ってくれていた。片桐高校でのこの3年半、いろいろな分掌で仕事をし、一つのところに腰を落ち着けることができなかった私であるが、その光景を目にした時、自分が取り組んできたことが一つになって胸に去来した。閉校式まであと半年、今一度これまで私をご指導くださった人たちに感謝しながら、片桐高校最後の生徒達にできること、そして統合校である法隆寺国際高校に伝えていけるものを、私自身思い残すことがないように本校で取り組んでいきたいと思う。

3 その他参考となる事項

奈良県立片桐高等学校ホームページ <http://www.katagiri-shs.ed.jp/>